

アンリ・ド・バイエ・ラツール会長（1925—1942）の時代

カール&リーゼロッテ・ディーム資料館所長
オリンピック研究センター(ケルン、ドイツ)
カール・レナーツ

2. バイエ-ラツール会長（1925－1942）の時代

2.1. クーベルタン、オリンピックの舞台を去る

1925年のプラハIOCセッションで、IOC会長を29年つとめたクーベルタンは、それまで何度も言っていたように、次の会長に立候補しないという決意を貫いた。委員の何人か、なかでもスウェーデンのクラレンス・フォン・ローゼン、アメリカのチャールズ・シェリルが、熱心に立候補を求めたのだが...

1924年のオリンピックを彼の故郷、活動の中心であったパリで開催するというIOCの決定、そして次の年、若いチェコ政府の招待によってプラハで教育についてのオリンピック kongress が開かれるということは、一ここでは同時に技術的な面についての kongress が予定されていた— 教育全体のなかに統合されたスポーツという彼の理想、そしてクーベルタンその人に対する敬意の証であった。しかし世界のスポーツの現実、今やオリンピックの旗の下に集まり、それ故にIOCのもとにあるスポーツ界の大勢はクーベルタンが思い描いたような線に沿って発展してはいなかった。

第1次世界大戦のあと、彼の、女性のオリンピック参加そしてオリンピック冬季大会の導入についての立場はIOCメンバーの中で少数派になっていた。そして彼が1921年につくった執行委員会(EC)は、会長としての彼が居心地悪く感じるほど重みを増していた。

クーベルタンが戦争に従事していた何年かの間、IOC会長代理を勤めた親しい友人、スイスのIOC委員、ゴードフレー・ド・ブローネーさえ、もはやすべての点で喜んでクーベルタンを支持するというわけではなくなっていた。これらの理由だけでも、クーベルタンの辞退を説明するのに十分であろう。

しかし、常に自分自身をスポーツの役員であるよりは教育者であると考えていたクーベルタンにとってもっと重大であったのは、当然のことながら、重要性を増していくスポーツが教育的役割から次第に離れていくこと、IOCとその会長が反対せざるをえなくなるような挑発を伴う発展であった。

「絶えず増大する技術的機能に捕らわれて、IOCは1897年と1913年の kongress で決められた教育的な任務を果たすことが出来なくなっている。」

クーベルタンは残された生涯、その精力をこの欠落を償うために捧げることになった。1925年11月15日の国際教育連盟設立に主役を演じ、一年後には国際スポーツ教育事務局を設置して、指導者となった。

会長職とともにIOC委員も辞任したが、彼はその後も、個々の点では不満を抱きながらも自分の生涯をかけた事業に対して忠実であった。オリンピック大会の名誉会長を引受け、筆をとり、講演をし、喜んで助言をした。1927年春には、ギリシャ政府の招きでアテネに赴き、「古代ギリシャギムナジウムの再建」について講演を行った。アテネからオリンピアに足を伸ばしたクーベルタンはオリンピック大会復興を記念するアルティス(聖域)の入口の柱の除幕式に出席した。彼が「世界の若者に」と題するメッセージを発表したのはこの時である。

クーベルタンはさまざまな理由から、その都度挨拶のメッセージは送ったものの、二度とオリンピック大会には出席しなかった。しかしオリंपイズムについて多くの点で同じ考えを持つカール・ディームとの親しい関係を通して、クーベルタンは1936年ベルリン大会の芸術プログラムの準備には深い関心を示していた。

二人はスイスで何回も会った。そしてクーベルタン男爵の大会開会式とベートーベンの第九シモニーを結び付けたいという希望は時間の不足のために叶えられなかったが、少なくとも最終楽章の有名なシラーの「歓喜の歌」は、開会式の日、夜、「オリंपィックの若者」と題した音楽劇の一部として演奏された。

1937年7月29日、彼の最後の共感のメッセージがアジアで最初のオリंपィック大会（東京）の組織委員会に対して贈られた。男爵は、アジア全体がオリंपィズムの理想に親しみ、ヘレニズムがアジアの芸術文化と融合してより高い総合に至ることを求めている。

クーベルタンが自分の仕事に背を向けることがなかったように、IOCもその長年の会長、今はオリंपィック大会名誉会長を忘れることはなかった。

1936年2月の第35回セッションで、クーベルタンをノーベル平和賞に押すことが決議され、その夏、49人のIOC委員が署名した手紙がオスロのノーベル賞委員会に送られた。

IOCはクーベルタンの物質的窮乏とも取り組んだ。彼の全財産はオリंपィックムーブメントの事業と教育、振興活動に使われてしまっていた。

後継者アンリ・ド・バイエ・ラツールは、1936年春、IOCの同僚にクーベルタンの経済的困難について告げた。スイスNOCの事務総長でクーベルタンの友人、フランシス・メッセルリはすべての国のNOCに対し、クーベルタンの五十年にわたる教育改革の業績を記念して彼に渡す基金を設立するよう提案した。

いくつかのNOC、NOCやIFのメンバー、個人的友人、国内スポーツ連盟、政府、国家元首が寄付し、「ピエール・ド・クーベルタン」基金は合計50,298.24 スイスフランに達した。しかしクーベルタンはもはやこの金を引き出す必要はなかった。彼の死後、この金は未亡人と病気の娘、ルネーに引き継がれた。

生涯最後の日々、彼の第一の関心は、ローザンヌの「モンルポ」荘につくったオリंपィック博物館であった。そこに彼は小さなアパートを持っていた。

しかし1936年、老齢のためその仕事も諦めねばならなかった。そして一人ジュネーブに移った。そこで彼は1937年9月2日、グランジュ公園を散歩中、ベンチに座ったまま死んだ。

その前年、ローザンヌ市はIOC執行委員会と話し合っ、クーベルタンが収集品を残した博物館の経営を引受け、1936年6月22日には男爵に名誉市民権を与えた。

男爵はその手稿の一部を、ディームが所長でドイツ帝国が経営しているベルリンの国際オリंपィック学院に残していた。すでに1934年、彼はディームとこの学院設立を話し合っていた。しかしそれは1938年3月まで実現しなかった。

現代のオリंपィック大会の設立者として歴史に残るこの人物の遺体はローザンヌに葬られてい

る。しかしその心臓は、遺言に従って、オリンピアに最後の憩いの場を見つけた。彼の心臓は、ギリシャ皇太子、バイエ-ラツールIOC会長そして多くのIOC委員列席の下、1927年に除幕された記念柱の下の骨壺に収められた。

2.2. バイエ-ラツール

IOC委員の多くが留任を願ったにもかかわらず、クーベルタンが1925年に会長としてもう一期留まることを拒否したために、IOCは1894年の委員会創設以来オリンピックムーブメントの推進力であり、代表者であった人物の後継者を選ばなければならなくなった。

プラハの第24回IOCセッションの議案では選挙は1925年5月28日午後に予定されていた。

第一回投票では欠席者の郵便投票も集計されたが、多くのメンバーはクーベルタンが再び立候補すると考えていたため、どの候補者も必要な過半数を得ることができなかった。40票の内、バイエ-ラツールが17票、ド・ブロネーが6票、ジュスティニアン・ド・クラリーが4票、メルキオール・ポリニャックが1票、無効票1票であった。

第二回投票では出席者しか投票できなかったが、バイエ-ラツールが27票中19票を得た。こうしてバイエ-ラツールが第三代IOC会長に選ばれたのである。

第一回投票からこのベルギー人候補者がハッキリ優勢であったことから、プラハに出席したIOC委員の中ではある種の合意があったと思われる。しかし何故最終的にバイエ-ラツールが選ばれたかについては想像できるだけである。

当然のことながら、1921年以来の執行委員会のメンバーがIOC内部ですでに重要な位置を占めていたので、彼等が最も有力な候補であった。

その中で最有力なのは執行委員会委員長、スイスのメンバー、ド・ブロネーであった。

彼はすでに暫定的にIOC会長職をつとめていた。しかし前に触れたように、彼とクーベルタンの以前の素晴らしい関係は最近陰りをみせていた。だからド・ブロネーを選んでは男爵が気を悪くするだろうという憚りがあったのだろう。

対照的に、新会長は前任者に対して常に忠実であった。バイエ-ラツールは執行委員会の副委員長、IOCの序列では三番目の地位にあった。そして残る三人のメンバーに対して、彼らよりIOC委員として少なくとも10年は先輩であるという利点があった。

前アントワープ県知事、フェルディナンド・ド・バイエ-ラツール伯爵とカロリーヌ・ドゥルトレモン・ド・デュラ伯爵夫人の子供として、1876年3月1日に生まれた若いアンリ・ド・バイエ-ラツールは、将来ベルギー国王アルベール一世(1875-1935)となる少年と一緒に育てられた。

ルーベン大学で学んだ後、彼はベルギー政府から託された沢山の外交的任務を帯びて長い旅に出た。若いころから、彼は熱心で多才な騎手であり、ベルギージョッキークラブ会長になったが、これは彼にとってはIOC会長と同じくらい重要な地位で、死ぬまで会長職に留まった。1903年、アンリ・ド・バイエ-ラツールはベルギー代表のIOC委員となった。

クーベルタンは「オリンピックレビュー」の中で彼についてこう言っている。

「同じことがベルギーの新メンバー、アンリ・ド・バイエ-ラツール伯爵についても言える。彼は秀れたスポーツマンであり、その情熱と能力はオリンピック大会へのベルギーの参加が彼の祖国と国王

の名誉となることを保証するであろう。」

バイエ-ラツールのIOCへの選出には隠れた動機があった。彼がブリュッセルでの kongress を開催できると考えられたからである。この kongress は前のベルギーのIOC委員、レイティアンがIOCを辞めたことで1903年から1905年に延期されていた。この kongress にはベルギー国王、レオポルド二世が後援を約束されていた。

実際、バイエ-ラツールはここでオリンピックに対する最初の業績を挙げる機会があった。それに彼は上に述べたクーベルタンを期待を満すことに非常に積極的であった。彼はベルギーオリンピック委員会の共同創立者であり、その第一の目的はベルギーチームのオリンピック大会への常時参加を確実にすることであった。

それまで、ベルギー人選手が参加しなかったのは1900年のパリ大会だけであったが、バイエ-ラツールは1908年のロンドン大会、1912年のストックホルム大会のベルギー選手団団長をつとめていた。

この年、ベルギーは首都ブリュッセルで1920年のオリンピック開催を提案した。しかし二年後、アントワープが代わって招致活動をするようになった。

この決定は大戦のためIOCによって1915年まで延期されたのだが、ベルギーのスポーツ界のリーダーたちはドイツによる本土占領中もクーベルタンと接触を続け、戦争が終わったら大会を開催したいと言っていた。

1919年の第1次世界大戦後の第一回IOCセッションで、1920年大会はフレイミッシュの都市、アントワープに決定したのだが、市は部分的に戦災を被っており、わずか一年半の準備期間の短さが懸念されていた。この決定は明らかにバイエ-ラツールの影響力によるものである。彼は組織委員会会長になり、大会成功に重要な役割を果たして、ドイツによってその中立を悪用された祖国に大きな満足をもたらした。

1923年に彼はベルギーNOCの会長に選ばれ死ぬまでつとめた。

1925年にバイエ-ラツールが国際オリンピックムーブメントの最高の地位についたとき、彼はIOCにおける22年間と、執行委員会創立以来の4年間を振り返ることができた。

彼の前には直ちに担わなければならない最初の任期8年間があったが、そこには拡大するオリンピックファミリーの内部問題があった。その構造は分裂を始める兆しを見せており、彼は先ずそれと取り組まなければならなかった。

大会プログラムの作成、オリンピック大会で女子種目を実施することについての論争、そして何よりもアマチュアの定義の問題、1920年代の議論の様子は今日となつては微笑を誘うものではあるが、アマチュア問題はIOCと国際競技連盟、なかでもサッカー、テニス、スキー連盟との間の最も激しい意見の相違を引き起こすものとなっていた。

クーベルタンはIOC内部で技術的問題があまりに重要になってきたことを嘆いていたので、後継者はそれを仕事の中心にせざるを得なかった。

バイエ-ラツールは男爵と違って教育者でも哲学者でもなかった。クーベルタンなら大きな構想を

もってオリンピックムーブメントに新しい地平を開くことが出来たかもしれないが。また彼は、繰り返し、繰り返し、自分の思想や理想を公衆に訴えたクーベルタンのような著述家でもなかった。

このベルギー人のスピーチは、IOCセッションや執行委員会や競技連盟の会議の開会に当たって行ったものが刊行されているだけである。そしてこれらのスピーチの中で彼は当面の問題、とくにアマチュア問題を繰り返し話している。このことに、託された遺産を忠実に守ろうとする彼の意図が最もハッキリ表れている。

クーベルタンは日常的な次元を越えてさまざまな方向に新天地を開拓しようとしていたが、バイエラツールはオリンピック憲章を守ることに専心した。

男爵は労働者のスポーツという提唱に応じて、イデオロギー的な保留なしにソ連のスポーツに非常な興味を示したが、IOCのヘッドである彼の後継者は「ボルシェビズム」の匂いのするものは一切拒否した。

オリンピックの現状に固執するこのベルギー人IOC会長はしばしば硬直した姿勢をとって敗北を喫した。例えばアムステルダム大会でのサッカーや女子の陸上競技は、1928年の彼の反対にもかかわらず導入された。しかし彼は投票による負けを彼の前任者と違って悪びれずに受け入れた。

また規則を守ることの厳格さはIOCでの彼のリーダーシップを特徴付けるもので、独裁的なクーベルタンに比べてより協力的で寛容なものであった。そして彼が主催したすべての会議は、組織と内容の両面で徹底した準備によって特徴付けられていた。

すべての点で、IOCは彼の最初の8年間の仕事の仕方に満足していたように思われる。というのは次の会長選挙が1933年ウィーンで行われたときに、バイエラツールは彼自身が主張した秘密投票で、全く問題なく更に8年の任期を再選されたからである。

もし彼が、それからの年月オリンピックムーブメントがスポーツに関係のない利害の大渦巻きに巻き込まれることを少しでも勘づいていたら、会長職を引き受けたかどうか疑問に思われるかもしれない。この大嵐は今から見れば、それに先立つ論争がまるで見戯に等しく思われるほどのものであった。

1936年のオリンピック大会は、1931年に、ベルリンに決まっていた。

そしてもしバイエラツールの再選の年に、ドイツでナチスが権力を握ることがなければ、そのあとはいつものアマチュア資格やプログラムについての議論があるくらいのことであつたらう。しかしナチスの政権獲得は、初めて否定しがたい鋭さで大会への政治の影響の問題を突きつけずにはおかなかった。

この状況のなかで、IOCの多数が支持した伝統的な中立の立場が本当に可能であつたかどうか想像してみても無駄なことであらう。しかしバイエラツールがいつもの頑固さで、オリンピック憲章の遵守、なかでもナショナルチームの構成に当たってユダヤ人差別の禁止を主張したことは、少なくとも彼の功績とすることができるだろう。

ドイツにおけるユダヤ人の状況を考えれば、これはたんなる上品な虚構に過ぎず、IOC会長はその実態を十分には知らなかったと考えられること、そしてヒトラーが結局はオリンピックを自分の勝利のプロパガンダに代えてしまったこと、はまた別の話である。

ナチス政権はベルリン大会の準備の間、そして大会期間中は比較的抑制のきいた態度を示した。しかしその直後から組織的にオリンピックムーブメントへの影響力を強めようとした。そしてそれは全面的に失敗であったとは言えないのである。

例えば、ベルリンの国際オリンピック学院の設立、IOCオフィシャルブレッティンのカール・ディームのオリッピッシュェントシャウへの合体、「歓喜を通じての力」協会へのオリンピックカップの授与、1936年大会のフィルムに関するレーニ・リーフェンシュタールへのオリンピックディプロマの贈呈、ヴェルナー・クリンゲベルクのIOC事務総長就任等である。

IOCは、ベルリン大会の大成功によってIOC内の信望が極点に達していたレヴァルトが半分ユダヤ人であるために、ナチスの指示によって党员、ヴァルター・フォン・ライヘナウに道を譲って辞任せざるを得なくなるのを座して見守るしかなかった。

レヴァルトの執行委員会の後継者は熱烈なナチであるカール・リッター・フォン・ハルトであった。

1939年に、1940年冬季大会がスキー競技とスキーインストラクターのアマチュア資格を巡る意見不一致を理由にサンモリッツ開催を撤回された事実、そしてドイツ帝国のボヘミアとモラビア併合、1938年のポグロムナイト(ユダヤ人虐殺)にも拘わらずガルミッシュパルテンキルヘンが再び開催地に選ばれ、バイエ-ラツールがベルリン大会の前にはユダヤ人に対する差別反対の原則を言わなかった事実は、いまや優先順位がどこにあるかを示すものであった。

どんな対価を払っても大会を開催することとスポーツのルールを守ることが第一の目的となり、普遍的な人道的な原則の擁護の情熱は薄くなったと結論したくなる。

ヒトラーのポーランド侵攻やその結果のドイツに対する宣戦布告の後でさえ、最初はIOCがオリンピック大会を中止することは問題にならなかった。

しかし戦争のヨーロッパ全土への拡大は、1940年大会開催についての議論に終止符を打った。1939年11月22日、フォン・ハルトはバイエ-ラツールにドイツが冬季大会開催の任務を放棄すると通告した。

バイエ-ラツールは以下のような言葉をもって答えた。

「第五回冬季大会に1936年大会よりも更に印象的な性格を与えるために貴下がしてこられた素晴らしい仕事が今や無駄になったと考えるのは何と悲しいことでありましょう。」

1940年7月、ディームが帝国スポーツ総統ハンス・フォン・チャンマー・ウント・オステン の指示でドイツ占領下のブリュッセルにIOC会長を訪ねた。総統は「国際オリンピック委員会の組織改正」をバイエ-ラツールと交渉することについてヒトラーとフォン・ハルトの同意を得ていた。この時、バイエ-ラツールはベルギージョッキークラブ会長としての資格でドイツ占領軍がすべてのサラブレッドを徴発したことに文句を言ったが、ディームの日記によれば「ドイツ人による乗っ取り」はほとんど彼からの抵抗に会わなかった。そしてディームは次のように書くことができた。

「オリンピックの問題については、彼は私の草案に賛成し、素晴らしいと言った。彼はIOC委員についての文章に手を入れただけであった。彼の承認は今後の交渉にとって非常に有効であろう。」

ナチスの第一の目的は、すでにレヴァルトの例で前もって行ったように、IOC内のドイツ人の地位の獲得に影響を与えることであった。彼らは、今やNSDAP、帝国体育国家社会主義同盟の傘下にある外部から独立したドイツスポーツのシステムの中に、指名について彼らのコントロールの及ばない国際機関の代表が入ることのないようにしようとした。

11月の半ば、フォン・チャンマー・ウント・オステン、フォン・ハルト、ディームの三人はIOC会長と更に話し合うため、ブリュッセルを訪れた。

内容についての結論は二つのソースから引き出せる。ディームは日記に書いている。

「V.チャンマーはバイエラツールに会長として残ってほしいと言った。IOC委員についての変更はそれぞれの国の問題であり、自分はIOCが若返ってほしいと思っているのだと譲歩を示した。若返りは何年かにわたって進行中であった。(もしV.チャンマーが55才で選ばれたら、彼は自分のことを若返りといったであろう)」。

フォン・チャンマー・ウント・オstenは、ディームとは違うトーンで、ドイツ外務大臣に対し、バイエラツールが改革に賛成したと報告している。

「独裁主義国家ドイツの希望が尊重されるという趣旨での改革についてである。即ち、第一に委員会の急激な若返り、第二に独裁主義国家が提案した代表は委員となるべきこと。」

彼は続ける。

「私はバイエラツールが会長としての資格でこの改革を行い、組織改革が実現するまで指導の責任を負うよう求めた。」

確かに、IOC会長はナチスがIOCのコントロールを手に入れるための最も有効なテコであった。

しかしヒトラーのドイツが望む「改革」のための操り人形の役割を押しつけられねばならなかったのはショックである。とどのつまり、独裁主義国家は自分の代表をIOC委員に送り込み、その委員が他の国の代表の承認について決定権を握ることになる。

一見したところ、会長がこの提案を即座に拒否しなかったのは残念に思えるかもしれない。しかし彼は少なくとも、ただひとつ憲章修正の承認権をもつIOCセッションを戦争終結まで招集しないという先見の明を持っていた。

もしナチスが勝っていたら、どの道、彼らの望みどおりになっていただろう。

バイエラツールは1942年1月6日から7日にかけての夜に死んだ。

兄弟と共にテブリッツシェーナウの城(ボヘミア)に住んでいた夫人、ヒトラー、外務省、IOC委員の多くはベルリンからの電報で知らされた。

ヒトラーは伯爵夫人に弔電を送り、葬儀に帰る彼女には兄弟の他、フォン・ハルト、ディームが付き添った。ディームはベルリンで彼女と会った。

バイエラツールの家での葬儀にはたった三人のIOC委員が立ち会った。フォン・ハルト、ベルギーのガストン・ド・トラノア、オランダのアルペルト・シュメルペニック・ファン・デル・オイエである。ファン・デル・オイエがIOCの花輪を捧げ、追悼の言葉を述べた。三人ともドイツの勢力圏から来たのであった。

ディームは公式には国際オリンピック学院を代表していたが、日記にベルギー国内オリンピック委員会のメンバーとドイツ代表の追悼式典についての話し合いのムードを、次のように記している。「我々があまりに出すぎていて、一種の宣伝をしようとしている、という彼らの感情に我々は気づいた。」

祖国が占領されてから、バイエ-ラツールはIOCメンバーの間の連絡を中立国スウェーデンのエドストレーム副会長にほとんど任せていた。

このこと自体が、おそらくナチスに対する拒否の姿勢の表明とみてよいだろう。

エドストレームがいまや、正当にもIOCのリーダーシップを握ることになった。

2.3. IOCと執行委員会－構造的枠組み

2.3.1. メンバーシップ

1894年のそもそもの始めからIOCは着実に拡大してきた。バイエ-ラツールが会長に選ばれたブラハセッションの終わりには委員は65人を数えた。

第2次世界大戦前までは委員の数は62人から70人の間を変動していたに過ぎなかった。

しかし1939年、戦争前の最後のロンドンセッションでは、やって来ることの予感のせい、7人の追加メンバーを選んで73人とこれまでの最高になった。そのため1946年の戦後第一回セッションまでにメンバーが22人減ったことも、そうでなければ受けたであろうほどの打撃にはならなかった。

バイエ-ラツールの全任期を通じて、IOC委員のおよそ60パーセントはヨーロッパの国々でIOCを代表する責任を負っており、国内オリンピック委員会のある国のほとんどが少なくとも一人のIOC委員を送っていた。同じ原則がヨーロッパ以外の国にも適用された。

憲章によればIOCは自ら委員を選び、指名することになっており、その委員はそれぞれの国においてIOCを代表するとされている。そして委員は終身、完全に独立している。

各国にオリンピック委員会ができるに従って、スポーツへの一般の関心が増し、IOC内部の地位によって影響力に差が出るようになると、人によってはIOC委員をIOC内部で外部の利益を代表する者としか思わなくなった。

そうしたわけで、エドストレームは自分がIOCに入る前から、将来は新しい委員を承認する前にその国のNOCと相談すべきだと提案していた。IOCの独立性を重んじていたクーベルタンは勿論、そのような相談をすることには批判的であった。バイエ-ラツールについて言えば、彼の融和を図る態度からしてクーベルタンとは少し違っていたかもしれない。

実際には、新委員の選出は執行委員会によってIOCに提案される。そしてIOCは大抵事前に公表されない指名について公開で投票した。

稀なケースでは郵便投票も行われたが、これには明確な定足数の規定がなかった。1926年、二人の新メンバーが委員の三分の一以下しか参加しない郵便投票で承認された。このタイプの選挙方法は1939年のロンドンで廃止された。

IOC委員は終身制であったが、第2次世界大戦中のセッションの長い中止期間を除いて死ぬまでつとめることはごく稀であった。いろいろな理由での辞任が多かったが、会長の辞任要求が無視された場合には、会費の未払いや無能力、不正行為等があったときに適用できる追放条項も何度か使われた。そうした例の一つはアメリカのアーネスト・リー・ヤンケで、あまり活動的ではなかったが1927年以来のメンバーであった。

彼はナチスドイツでのオリンピック大会をアメリカがボイコットするよう猛烈なキャンペーンを行った。そしてIOCが当時その利益となると考えていた考え方を攻撃した。IOCはドイツ政府の保証を信用し、ベルリン大会に固執していたのである。

まだヒトラードイツの組織的な成功とドイツ選手の好成績が続いていたが、IOCはガルミッシュパルテンキルヘンのセッションとそれに続くベルリンのセッションでヤンケの行為について議論し、追放を決めた。省みて、あまり気持ちのよい決定ではなかった。

当時のIOCとその会長(上参照)は盲目、或いは少なくとも近視ではなかったのかと問うてみたくなる。

1917年に滅びたロシア帝国のIOC委員でパリに亡命していた、ロシアのプリンス、レオン・ウールソフは1933年の死まで委員であったが、オーストリアの委員テオドール・シュミットは1938年3月3日のドイツのオーストリア併合宣言のあと直ちに、1938年4月号のIOCオフィシャルブレットインからその名が削除された。シュミットは辞任しなかったが、ユダヤ人であるためアメリカに移住せざるを得なかった。

イリ・グート-ヤルコフスキーについてはいくらかましであった。ドイツ軍が彼の祖国を占領し、ボヘミアとモヴィアに帝国保護領を設立したほとんど丁度一年後、彼の将来の地位の問題が起こった。1939年6月早々、ロンドンで開かれる第39回IOCセッションでは1940年冬季大会のガルミッシュパルテンキルヘン開催を議論することになっていたが、チェコの委員であるグート-ヤルコフスキーはプラハでロンドンへの旅行の許可を貰うことができず、バイエ-ラツールに抗議した。バイエ-ラツールとエドストレームの両人は彼がロンドンに来ることができるという電報を打った。おそらくドイツのIOC委員たちと合意ができたのであろう。

フォン・ライヘナウが述べているように、上からの指示によるものか、彼自身のイニシアチブによるものかは分からないが、グート-ヤルコフスキーは委員に留まることができた。ドイツの委員にとっては、クーベルタンクの古い戦友であり、45才からの委員で創立当時の委員の最後の一人の賛成を得られずに、1940年大会開催を危うくするのはあまりに大きなリスクであった。つまりドイツの委員たちにとっては、グートが旅行許可の再申請をするには遅すぎるというタイミングが最も望ましかったわけである。

IOCが引き込まれた危険な依存の渦巻きは1939年6月6日のIOCセッションの議事録に明らかである。これにはバイエ-ラツールと議事録署名人クリンゲベルクの署名があり、以下の文章を含んでいる。

「会長は、最近の中央ヨーロッパの変化に鑑み、イリ・グート-ヤルコフスキー博士の地位を明確にすることが必要であった、と発言した... 保護領の設立とズデーテンランドの帝国併合 [ドイツ版:ズデーテンランドの帝国への回帰] にしたがってイリ・グート-ヤルコフスキー博士が以前の地位を確保し、ボヘミアとモラヴィアの代表となるのは当然である。」

テキストは続く:

「会長はこの解決策がドイツ側の反対に一切あわなかったことを喜んだ。そしてこの話し合いの成功に対してドイツの委員たちに感謝した。」

2.3.2. セッション

1936年を例外として、IOCは1926年から1939年まで年に一回会合した。1936年はヤンケ事件のためにエキストラセッションをガルミッシュパルテンキルヘンで開いた。この時は66人の委員のうち15人しか出席しなかった。

ロサンゼルス大会の際の1932年のセッション以外、すべての会議はヨーロッパで行われた。1938年のカイロにしてもヨーロッパのすぐ近くである。

会議の場所は毎年決められていたが、後にはIOCセッションを開く利益が大きくなるに従って数年前に決められるようになった。例えば、1925年のセッションはド・ペンハ・ガルシア伯爵の招待を受け入れて翌年をリスボンに決め、1926年のセッションはアルベール・ゴウティエ・ヴィニヤール伯爵の招待で翌年をモナコとした。

1928年オリンピック大会のために会議場になったアムステルダムでは、第一回アフリカ大会が開かれるアレキサンドリアが1929年の会場として合意された。

しかし長い準備にもかかわらず、この大会は植民地勢力イギリスとフランスの反対で中止され、セッションは急遽ローザンヌに変更された。

1930年にはベルリンでセッションが行われ、続いてしばらく最後となるオリンピック kongress が開かれた。そこではじめて、次のセッションの会場について投票が行われた。

候補地はバルセロナ、ベオグラード、ウィーンであった。

バルセロナが1931年、ウィーンが僅差で1933年となった。1932年のオリンピックイヤーはロサンゼルスである。バルセロナでは、IOCは1934年セッションを40周年公式祝賀と共にアテネで行うことに決めた。

このセッションは5月の16日から19日まで続き、いろいろなイベントのプログラムが伴った。アヴェロフ記念堂とIOC初代会長ヴィケラスおよび1896年組織委員会メンバーの墓への献花に始まり、アクロポリスでの式典、古代スタイルの競技会と続き、オリンピアでの祝典で最高潮に達した。

そこでバイエラツールとオリンピア市長はクーベルタンを記念して1927年にギリシャオリンピック委員会が建てた柱のところでスピーチを行った。ギリシャオリンピック委員会会長は市長にオリーブの枝を贈り、1936年にオリンピック聖火を採火しリレーによってベルリンに運ぶ許可を求めた。これはカール・ディームのアイデアであった。

1935年のセッションは、ロサンゼルスでオスロが開催都市として選ばれた。

オスロではポーランドとエジプトのIOC委員の申し出で、1937年ワルシャワ、1938年カイロがそれぞれ会場と決まった。

ナイル河畔のセッションでは、ロンドンが1939年に決まり、すでに8年ウエイティングリストに載っていたベオグラードは1941年まで待つことになった。

ほとんど全ての会議がヨーロッパで行われたのはIOC委員の構成を見れば不思議ではない。その上、「海の向こう」のメンバーの三分の一弱が実際はヨーロッパに住んでいたのだから尚更である。そしてヨーロッパで行われるセッションもしばしば旅行は長く困難であった。そしてリスボンやオスロのような大陸の端のほうで行われるセッションは中央の会場で行われるセッションより出席者が少なかった。

インドや極東、南アフリカ、アメリカのIOC委員にとって、何日も、時には何週間もかかる海の旅は大変な経済的負担であった。そうしたわけで、そうした地域に住んでいる委員はセッションに出席することが少なかった。そして複数の委員のいる国では交代で出席した。そして数年後、彼らは重荷を誰かに引き継ぐためにIOC委員を辞任することが多かった。バイエ-ラツール会長の時代に開かれた15のセッションで平均すると42.7パーセントの出席率であった。最高の出席率と最低の出席率が両方とも1936年に記録された。

ガルミッシュパルテンキルヘンでは77パーセントが欠席した。反対にベルリンでは委員の72パーセントが出席した。

ヨーロッパ人の出席率は勿論非常に高かったが、職業上の義務に縛られていない人ばかりではなかった。何人かは祖国で政治家、軍人、財界人として重要な位置を占めており、毎年長く国をあけることは不可能であった。例えば、スイスのIOC委員、ギサン将軍は、サンモリッツ冬季大会を決める投票が議題に上っていたにもかかわらず、1939年のロンドンセッションに出席できなかった。さらに、IOC委員の年齢を考えれば、セッションに多くの欠席者があった最大の理由は年齢であったと言ってよいであろう。

2.3.3. 執行委員会

IOCの一部として、その性格上オリンピックムーブメントのリーダーシップを担う存在として、執行委員会(EC) [英語では1955年以来理事会と呼ばれている] はクーベルタンの発案で1921年につくられた。クーベルタンの提案理由は、南アメリカに旅行を計画しており、長い間IOCの管理運営が出来なくなるだろうというものであった。

彼の考えでは新しい機関は臨時的なものであった。クーベルタンが予見せず、勿論望みもしなかったことだが、後から考えると少しも不思議でないのは、彼が最後に作り出したものは、IOC内部の新しい権力中枢に発展していったことである。

会議の準備と事後処理は、執行委員会にIOCの仕事に対する大きな影響力を与えた。

委員となったゴードフレー・ド・ブロネー、ジグフリード・エドストレーム、イリ・グート-ヤルコフスキー、メルキオール・ド・ポリニャック、アンリ・ド・バイエ-ラツール等五人はすべてIOCの積極的な活動家であり、引退するまで30年以上IOC委員であった。彼らの秀れた能力を考えれば、ECが単に技術的な下準備をするだけでなくIOC全体の代わりに重大な決定をするようになったのは少しも不思議ではない。

当然のことながら、クーベルタンはすぐにこの成り行きに苛立った。ECは彼自身の権威に衝突したし、本当はECがいつの間にか先細りになって消えていくのを望んでいたふしがあるからである。

私的な面でも彼の発案は不幸な結果になった。というのはIOC会長としてのクーベルタンとEC委

員長ド・ブロネーの意見の相違は、この二人の間の一時は大変親密であった友情を傷付けたからである。

ローザンヌセッションの議事録にあるように、クーベルタンが自分をECの委員に入れなかった事実は、この新しい機関の可能性を過小評価した印であるとともに、ECの権利義務をIOC全体のなかで規定しなかったのは彼の手抜きであった。

この仕事はEC自身に残された。1921年11月、パリで開かれた第一回会議は規定に関する審議から始まった。そして一年一回会合すること、IOC会長関連の財政問題に取り組むこと、憲章の規則の適用を強化すること、とくに大会組織委員会に関して強化することを決議した。バイエ-ラツールが副委員長になり、ポリニャックがセクレタリーになった。

ポリニャックの住まいのあるパリがECの所在地として選ばれた。しかしわずか一年後、スイスに住んでいる委員長ド・ブロネーの動議で、ECはローザンヌに移された。

何人かの委員は、移転がIOC会長との間に摩擦を生むのではないかと心配したが、クーベルタン自身が移転に何の異議も唱えなかったので安心した。

最初の四年間は執行委員会にとって試験期間であったと見なすこともできよう。その間にECは可能性や限界を試し、一方では会長との付き合い方、一方ではIOCそのものとの付き合い方を試すことができた。1925年にIOC自身が正確な役割分担の問題に取り組み、将来IOC会長がEC委員長も兼任すべきことを決めた。この規則はクーベルタンの後継者、バイエ-ラツールが会長になって実現した。彼はEC委員長もド・ブロネーから引き継いだ。ド・ブロネーはIOC副会長の座だけ維持した。その結果、ECは事実上IOC理事会の様な存在になった。プラハで採択された憲章改訂版では、さらにECはそのメンバーの中からIOC副会長を選ぶことも規定された。副会長は会長が出席出来ないとき、辞任したとき、死亡したとき会長に代わる。これは理事会に対する重大な付託である。

ECの責任事項の拡大から、最初のECが有効で有能であったことを証明したことが分かる。財政運営に加えて、IOCセッションの議題の作成、規則の執行、また新しいIOC委員の提案、オリンピック大会に対する影響力の行使、国際競技連盟との協力もその権限に加わった。その結果、IOC全体では柔軟に対応できない仕事が会長一人の肩だけにかかることはなくなった。この展開を疑いもなくバイエ-ラツールは歓迎した。彼は一人で決断することは好きでなかった。

それまで期限のなかったECメンバーの任期も1925年に決められた。任期は4年と決まった。このシステムでの最初の選挙は1927年モナコのセッションで行われた。

モナコではそれまで6人であったECメンバーの数が新たな憲章改正で7人に増えた。

それで執行委員会は従来のメンバーを外すことなくドイツ人、テオドール・レヴァルトを委員に選ぶことができた。レヴァルトを加えた「設立メンバー」、バイエ-ラツール、ド・ブロネー、ド・ポリニャック、エドストレームが第二代執行委員会に1927年から1931年まで留まった。これに、逆上って1924年にグート-ヤルコフスキーの辞任にともなって選ばれたイギリス人、レジナルド・ケンティッシュと、クーベルタンが辞めたあと1926年IOC委員になったアメリカ人、チャールズ・シェリルも含まれた。

バルセロナの第30回セッションで同じ人達が再選されたが、イギリス人委員ケンティッシュは同国人クラレンス・アバデア卿に交代した。

次回のEC選挙でもまた一人だけが交代した。チャールズ・シェリルが辞任し、イタリア人、アルベ

ルト・ボナコサ伯爵が選ばれた。

1937年のド・ブロネーのアルジェリアでの死と、同じ年ナチスによってIOC辞任を強要されたレヴァルトの退任をうけてワルシャワセッションでの選挙となり、アメリカ人、アベリー・ブランデーとドイツ人、カール・リヒター・フォン・ハルトがECのメンバーになった。

1939年のロンドンにおける通常選挙では、ECはワルシャワでの構成と同じになった。

しかしそれに続く戦争の間は会合が開かれることはなく、バイエ-ラツールは必要に応じてメンバーと通信によって相談した。例えば、メンバーは戦争中大会を中立国から引き上げることが出来るかどうか、もし大会が開かれた場合、交戦国は参加が認められるかどうかについて意見を求められた。しかしバイエ-ラツールは1940年にセッションを、こともあろうにベルリンで開催せよとのブランデーとエドストレームの要求には同意しなかった。

IOC自体が保持した責任はオリンピック憲章に係わる決定、オリンピックムーブメントの基本法、オリンピック開催都市の決定であった。とって公式な規定上の権限が何時も文字通りに尊重されたわけではなかった。

例えば、オリンピック kongress の決定は、kongress には勿論規則上多くのIOC委員、国際競技連盟代表からなる評議員が執行委員会とともに出席していたわけではあるが、IOC自体の追認なしで施行された。

規則制定の必要が何よりも強く感じられたのは、女子競技のオリンピックプログラムの増加、冬季大会の導入、アマチュア基準の確立についてであった。アマチュア問題はとくに、バイエ-ラツールの会長時代を通じて、IOCと多くの国際競技連盟との間の定期的な紛争の種であった。こうした紛争が特定のオリンピック大会を背景に起きると、大会組織委員会もまたIOCに対抗する当事者グループの一員に加わった。

2.4. 女性の登場

2.4.1. 最初の女性陸上競技連盟

第1次世界大戦以前は、クーベルタンが乗り気でなかったため、女性はオリンピック大会の二三の競技に参加できただけであった。1900年のパリ、1904年のセントルイスでは、世界博覧会主催者の大会プログラムに対する大きな影響力のおかげで、女性がゴルフ、テニス、アーチェリーに参加することができた。1908年にはアイススケートが加わった。

しかし本格的な拡充は、イギリスとスウェーデンのIOC委員の積極的な働きかけによって、1912年のストックホルム大会に女性の水泳競技参加が認められるまで可能にはならなかった。

第1次世界大戦の直前から、とくに直後、女性の法的、社会的、政治的役割は、とりわけアメリカとヨーロッパで変わりはじめた。戦時中に彼女たちが得た自信と、ほとんどすべての職業につくことができるようになって獲得した大きな影響力、そして彼女たちの選挙権と被選挙権がスポーツに影響を与えた。

女性はオリンピック大会への全面参加を要求しはじめた。1920年のアントワープ大会に対するこの要求がIOCの抵抗、とくにクーベルタンの抵抗によって挫折すると、女性たちはスポーツにおけ

る男女同権を実現するために別の道を探り、オリンピックの主要競技、陸上競技を始めた。クーベルタンはことあるごとに女性の競技と女性自身による競技連盟の全面廃止を呼びかけていたのである。

女性の陸上競技の最初の芽は、第1次世界大戦前と大戦中にヨーロッパ、とくにオーストリアとフランスで萌え出た。フランスには女性スポーツクラブが設立された。

1917年、このクラブは第一回フランス女性陸上選手権大会を開催し、他の国がすぐこれに習った。女性スポーツの統合組織、フランス女性スポーツ協会連合(FSFSF)が同じ年の12月に設立された。フランス陸上連盟も女性に注意を向けはじめたが、当然のことながら数年間にわたって二つの組織の間の軋轢が続いた。

1921年3月にモンテカルロで数日間続く国際女性スポーツ祭が催され、主としてトラックとフィールド競技、そしてダンスとゲームが行われ、フランス、イギリス、イタリア、スイスのチームが参加した。

このイベントは新聞によって女性オリンピックとして広く伝えられた。この催しは次の年もその次の年も行われた。この第一回競技会の成功は国際陸上競技の発展に大きな衝撃を与えた。帰国後、イギリスの参加者はロンドンオリンピック陸上クラブを設立した。

10月30日にはパリで、国際女性陸上競技会がフランスとイギリスの間で行われた。

その翌日、イギリス、アメリカ、フランス、イタリア、チェコスロバキアの代表が国際女性スポーツ連盟(FSFI)を結成した。定款と規約の草案が作られ、FSFSFの前事務総長、1920年以来会長であったアリス・ミアが国際連盟の会長になった。

一年後、1922年8月20日、FSFIはパリで国際陸上競技会を開催し、5カ国から65人の選手が参加、2000人の観客の前で11競技に18の世界記録を出した。

この競技会は第一回女性オリンピック大会と呼ばれた。開会式はオリンピックの式次第に則って各国の行進で始まり、アリス・ミアは次の言葉を述べた「私は第一回世界女性オリンピック大会の開会を宣言する」。

この大会の成功は女性の陸上競技の発展をさらに促した。FSFIはこの女性オリンピック大会を四年ごとに開催し、会期も数日間に伸ばすことを決定した。

IOCはこの展開を見逃すわけにはいかなかった。IOCはこれを「悪用と行き過ぎ」と呼んだ。そして1923年、国際陸上競技連盟、IAAFにこの問題に取り組むようよう要求した。IAAFもこの件を憂慮し1924年7月のパリでの連盟コンGRESSで定款のなかに女性の陸上競技について責任をもつことを書き入れた。しかし依然として、オリンピック大会の陸上競技には女性の参加は許さるべきでない、という見解を取っていた。

アリス・ミアのFSFI承認を求める1921年の要求を拒否していた国際陸上競技連盟は、女性連盟と接触する詳細な任務を帯びた委員会を指名した。FSFIはIAAFのこの決定をにべもなく拒否した。

二年以上に及ぶ交渉の結果、妥協が成立した。曰く、FSFIは女性陸上競技の連盟として独立を維持する、しかしIAAFのルールと規則に従う。国際競技会の開催を続けるが「オリンピック」という言葉は使わない。そしてついに、五つの女子陸上競技種目(100メートル、800メートル、4 X 100

メートルリレー、走り高跳び、円盤投げ) をオリンピックプログラムに加えることがIOCに提案されることになった。

常に自らの領域の外で「オリンピック」という言葉が使われるのを防ぐよう努めてきたIOCにとって、第二の点がとくに重要であった。そのためアリス・ミアは1926年3月8日のEC会議に招かれた。そこで彼女は再び女性の大会でその言葉を使わないよう求められた。女性に対する干渉が成功したのに次いで、学生についてもこれは1927年に成功した。「学生オリンピック大会」は「国際大学大会」と改名された。

しかし労働者の大会については、IOCは強い抵抗に会った。「労働者オリンピック」は6年おきに1925年、1931年、1937年と行われた。

IAAFがIOCに提案することに同意した女性陸上競技についての動議は、もとIAAF会長、IOC副会長、シーグフリート・エドストレームによって1926年5月のリスボンセッションで提案された。議事録には以下のようにある。

「エドストレーム氏の提案により、国際オリンピック委員会は大会の限られた数の陸上競技に女性の出場を許すことを決定した。」

ハーグの第8回IAAF kongressには、エドストレームだけでなく、IOC会長バイエラツール、二人のECメンバー、レジナルド・ケンティッシュ、テオドル・レヴァルトも出席していたが、交渉を担当した委員会の結論は再び激しい論議の的となった。

とくにフィンランドの代表、有名なコーチ、ラウリ・ピカラはオリンピックへの女性の参加に猛烈に反対した。一方ドイツのベルグマン夫妻は同じような激しさでそれと反対の意見を擁護した。

結局、IAAFは、12票対5票でスウェーデンのボー・エケルンドの提案した次のような妥協案を採用した。「女性の競技は1928年のオリンピック大会のプログラムに試験的に含まれる。」

第2回女性世界大会の機会に、1926年ヨテボリで開かれたFSFIの第4回kongressは交渉の結果に満足しなかった。アリス・ミアはイベントの名を変える必要を説明し、わずか5つの競技だがオリンピック大会のプログラムに含まれたことは女性陸上競技にとってささやかな成功であると述べた。しかしドイツの加盟が認められてFSFIの副会長になった医者ヴァルター・ベルグマンは、そんな惨めなことならオリンピック大会に参加を拒否すべきであるとまで言った。

FSFIは結局、オリンピック大会に参加するかどうかは会員である個々の組織に任せることにした。その結果、女性世界大会でいつも国別ランキングの一位であったイギリスの女性はアムステルダムオリンピック大会に出場しなかった。

kongressは「女性スポーツのためのオリンピック委員会」の委員に12人を指名した。これは1928年のアムステルダム大会に女性種目を登場させることを審議するためのものであった。第2回の女性世界大会そのものは、彼女たちなりのオリンピック式典を行い、8カ国参加、12種目が行われ、5つの世界新記録をだし、三日間の競技に17,000人の観客を集め大成功であった。

2.4.2. オリンピック大会における女性の陸上競技

1928年のアムステルダムオリンピック大会で女性は4つの競技に参加した。

陸上のほか、体操の団体がプログラムに加えられた。フェンシングは1924年からプログラムにあった。これは各国の大学のフェンシング愛好者の影響力のお陰である。

1912年大会に導入された水泳競技は競技リストを完成した。

なお、女性はフィギュアスケートでは大会に参加していた(1908年以来)。

しかしテニスは男女とも競技連盟とIOCのアマチュア問題を巡る衝突のために落とされた。女性の競技種目の数は、テニスの3種目が除外されたために11から14に増えただけであり、参加国の数も20から24になっただけであったが、女性選手の絶対数と全選手の中に占める割合は1924年に比べて倍増した(136人から 290人に、4.4%から9.6%に)。

この数字は18の国からの101人の女子陸上競技選手、5カ国からの60人の女子体操選手を含んでいる。

ロサンゼルス大会が近づくにつれ、女性の種目についての「綱引き」が再び始まった。アムステルダム大会の間に、いまや会員として23の連盟を持つFSFIは kongress を開いた。これにはIAAF 会長、エドストレームも出席し、オリンピックにおける「陸上競技のすべてのプログラムへの女性参加」を要求する会議のアイデアと支持した。

そこで開かれたIAAFの kongress でも、アリス・ミアは彼女の連盟の要求を提出した。何回も投票が行われ、女性の陸上競技を受け入れることは16対6で原則的に承認されたが、すべてのプログラムという要求は拒否された(13対9)。

個々の投票では、100メートル、4 X 100メートルリレー、80メートルハードル、走り高飛び、円盤投げ、槍投げが1932年大会に承認されたが、200メートル、800メートル、砲丸投げ、走り幅跳びは拒否された。

IAAFのためらいが続いたのは、とくに女子800メートルの除外は、疑いもなくアムステルダム大会の経験の影響である。一人の日本選手と二人のカナダ選手が草の上に倒れ込んだが、これは明らかに全身疲労のためというよりは落胆のためであった。

この種のことは男子でも珍しいことではない。しかしこの事件は役員、医者、ジャーナリストの間に強い批判を巻き起こし、女子陸上種目の廃止の要求にまで高まった。

しかしわずか二日後、同じカナダの女子選手が 4 X 100メートルリレーで大幅に世界記録を破ることが出来た事実はまったく見過ごされた。

1929年4月のローザンヌにおける第28回IOCセッションは再び女性の参加問題に取り組んだ。このセッションでは1930年に予定されたベルリンでの kongress の準備が行われた。北欧の国々とフィンランドのオリンピック委員会は女子種目の全面的廃止を要求した。エドストレームの動議で、問題は執行委員会の議論に任された。

7月にヴィッテルで行われたECの会議では、提案されたオリンピックプログラム見直しについて女子の種目を体操、水泳、フェンシング、テニスに限るよう勧告された。バイエラツールは「陸上」は将来認めるようにしたいと考えた。

1930年5月末にベルリンで開かれたIOC kongressで、会長はECの提案を新しいプログラムについて作業していた委員会に付託した。長い議論が続いたが、体操、水泳、テニス、アイススケートはほとんど全会一致（26対1）、陸上は（17対9）、フェンシングは（19対8）のそれぞれ圧倒的多数で承認された。

しかしメッセルリの提案、ヨット競技に女性を参加させる件は大差で否決された。

実際にはそれまでも沢山の女性がヨットに乗っていて、成功も収めていた。例えば、アントワープ大会でイギリスのドロシー・ウィニフレッド・ライト夫人が、アムステルダム大会ではヴィルジニア・ヘリオ夫人が夫のヨットのクルーをつとめ両方とも金メダルを得ていた。1930年の禁止にもかかわらず、1936年のベルリン大会には三人の女性がヨットに参加したがIOCは異議をとらななかった。多分、基本的には今日でも同じだが、スキッパーの名前だけが問題だったからであろう。

Kongressの全体セッションで、委員会の勧告案にもかかわらず体操、水泳、テニス、アイススケートに女性参加を限定する案が再び提案された。しかしこれは全会一致で否決された。上に述べた6つの競技のリストを最終的なものとし、それ以上拡大しないとする動議もまた否決された。これでIOCは、最終的にこの件についてフリーハンドを得た。

1930年9月6日から7日にかけて、第3回世界女性大会がプラハで開かれ、17の国の選手が12種目の陸上競技、バスケットボール、ハンドボール、ハゼナ（一種のハンドボール）のチームゲームに参加した。オリンピックの開会式によく似た式典に続いて行われた試合には55,000人の観客が集まった。初参加のドイツチームは国別ランキングであっさり一位になった。

1931年のバルセロナのセッションで、女性参加についてのkongressの漠然とした結論に照らしてバイエラツールが主導したさらに長い議論の末、IOCは個別投票の結果ロサンゼルス大会に関しては、小委員会がすでに決めたリストを承認した。例外はテニスで、国際ローンテニス連盟のアマチュア問題についてのIOCと異なる態度のために保留された。

経済危機とヨーロッパ人にとっての長い困難な旅のために、アメリカの西海岸の大会に参加した女性の数は1928年にエントリーした数の半分以下であった。しかし女性の参加率は9.6パーセントから9パーセントにわずかに減っただけであった。何故なら男子も同じ困難を経験していたからである。

体操の試合はなかったが、女性の陸上競技プログラムは1928年にIAAFで承認された6種目で構成されていた。それでもなお、大会の際に開催されたIAAF kongressで、フランシス・メッセルリが代表するFSFIは、1936年大会を目指して再び女性の全プログラム参加を要求した。そして受け入れられなければ完全撤退すると脅しをかけた。

かつて一度IAAFはこの極端な提案を拒否していたが、今度は女性連盟が1932年9月の第7回ウィーンkongressでの立場を再確認する番であった。

1936年についてFSFIは12の陸上競技種目を要求した。

2.4.3. FSFIの終わり

しかしFSFIの星は光が衰えつつあった。第4回世界女性大会は再び参加国数で記録を更新し

たが、観客の関心は前回以来衰えていた。大会のすぐ後開かれた第8回FSFIコンGRESはドイツの最高幹部会メンバー、ハインリッヒ・フォス以下の提案を支持した。「世界女性大会の全プログラムをオリンピックプログラムの中に統合すべきである。そうすれば、世界女性大会は自然に必要ななくなるであろう。」

予想されたように、もしIAAFとIOCがこの提案を拒否していたら、FSFIは女性のためのオリンピック大会をもう一度、今度は全てのスポーツを含む本当に完全なプログラムで開催する可能性を検討していたであろう。

しかし結局、25周年記念のIOCアテネセッションは再度の投票で僅差ながら女性の陸上競技の維持をきめた。ところが同時に、FSFIはIAAFの強力な挑戦に直面した。IAAFは自ら両方の性に責任を持つべきものと考えたのである。

1934年8月のコンGRESでIAAFはそのメンバーである連盟にFSFIを脱退するよう勧告する可能性について討論した。各連盟にとって二つの国際連盟の会員であることは組織的・経済的に重荷となっていたのである。この問題は激しい議論の末、もう一度持ち越された。しかしFSFI自身が提案した世界女性大会の終結がFSFIの権威の危機をさらに高めたことは明らかである。

IOCへの手紙でアリス・ミアは、以前の立場とは正反対の立場に立って、すべての女性種目をオリンピックから除き、FSFI自身が四年に一度女性オリンピックを開催するという提案を行った。

1935年はじめのオスロにおける第33回セッションで、IOCはこの手紙を実際には検討したが、「ミア夫人の提案は関係国際連盟間の合意ができるまで審議するわけにはいかない」と結論した。

1934年のIOCの決定に基づいて1936年のガルミッシュ・パルテンキルヘンの冬季大会プログラムに第二の女性競技としてアルペンスキーが含まれたのに続いて、夏の大会の際にベルリンでFSFIとIAAFの両方がコンGRESを開催した。

ベルリン大会には26カ国から328人という記録的な女子選手が参加した(しかし参加率はアムステルダムとロサンゼルスと数字を下回り、8.1パーセントであった)。

両連盟の間の緊張にもかかわらず、大会を前に交渉が行われ、交渉委員会は三点の合意に達した。

- 1)世界記録の公認
- 2)1940年大会での完全な女性プログラムの実施
- 3)1938年ウィーンにおける世界女性大会

しかしIAAFは総会で2)と3)を拒否し、IAAFが女性陸上競技の唯一の統括団体であることを宣言、その論理的帰結としてFSFIの解散を要求した。IAAF自身は、ライバルであるFSFIへの手紙で述べているように、陸上競技プログラムの「拡充を達成するために全力を尽くす」であろう。しかしこれは「国際オリンピック委員会との合意によってのみ可能となる」。彼らは次のIOCセッションを待たなければならなかった。

FSFIは公式に解散したようには見えなかったが、1936年以降何の活動も行わなかった。第5回世界女性大会は行われず。その代わりに予定されていた会場、ウィーンで、第1回ヨーロッパ女子陸上選手権がIAAF主催で開催された。

1938年3月、カイロのIOCセッションで、委員は「国内アマチュア陸上連盟女子部門」からの一通の手紙を受け取った。手紙はオリンピック大会からすべての女子種目を除くように求めている。アリス・ミアが三年前に同じ提案をしたときと同じように、IOCはこれが国際競技連盟の問題であるとの立場をとった。

同じ会議で、IAAFの提案に従い、男子1万メートル競歩の他に、女子の200メートル、走り幅跳び、砲丸投げの三種目がプログラムに追加された。しかしこの決定は1948年のロンドン大会まで実施されなかった。

カイロセッションは、東京大会では1936年ベルリン大会で実施された女子体操団体を除くことを決めた。日本の辞退によって開催都市となった1940年ヘルシンキ大会の組織委員会は、女子体操種目全体をやめる口実としてこの決定を使った。

この問題の真の理由は、興味深いことに、フィンランド女子体操連盟の態度にあった。フィンランド女子体操連盟はスウェーデン体操の伝統に従って、「この種の試合」を拒否していたのである。

2.5. アマチュア問題

2.5.1. 憲章上のアマチュア

女性の競技については、IOCはスポーツをする女性のためにオリンピックプログラムの拡張によって、多くのIOC委員が属している社会で起こっている発展にペースを合わせる、あるいは追いつこうとしたのであるが、アマチュア問題については歴史的な方向を頑なに守ろうとした。

とくにバイエルツールはその職にあった16年間、彼の理解した限りにおいてクーベルタンの遺産を守るために全力を尽くした。彼は国際競技連盟との深刻な衝突もものともしなかったが、そのために1928年のオリンピックプログラムから射撃が、1932年にはサッカーが、1928年以後（1984年まで）テニスが消えた。

1936年には問題は冬季大会に広がり、多くのスキーヤーがFISのアマチュアであってもIOCのアマチュアではないため、その年の大会に参加できなかった。

二つの組織はその後も争いを続け、もし1940年の冬季大会が開催されたら、プログラムにスキー競技のない、ノルディックもアルペンもない大会になるところであった。

アマチュア問題は、IOCの歴史と解きがたく絡み合っている。1894年のパリでの設立コンGRESでも、オリンピック大会の復興そのものよりもアマチュアについての考え方のほうが大きな意味を持っていた。

クーベルタンの目的はアマチュア資格を管理する規則を使って国際試合を可能にし、実施することであった。だから彼にとっては個々の国際連盟の内部で誰がアマチュアとして競技できるかハッキリしていれば、それで十分であったし、会長職にある間そういう態度を通した。

クーベルタンの任期が終わりに近づくにしたがって、高度のスポーツとオリンピックに対する世間の関心の高まりからこの問題はよりデリケートなものになってきた。しかし彼は、すべてのスポーツに適用できる、関係者すべてが賛成する公式を見つけられる可能性については懐疑的なままであった。

1925年のプラハオリンピック kongress では、国際競技連盟が少なくともその制限内でオリンピック大会に選手を参加させることのできる枠組みをアマチュア規則に盛り込もうという試みがなされた。

プラハで開かれた技術 kongress では、アマチュア問題と、すべての参加者がアマチュア規則に基づいて誓わなければならないオリンピック宣誓は、議題の冒頭の1と2にあり、この議題に関する議論は会議の大半を占めた。

IOCは「アマチュア憲章」の草案をつくり、それに基づいて問題となったケースを判定する機関を「審査委員会」とすることを考えた。しかし自分のアマチュア規則に干渉されることを嫌った国際競技連盟はそのような上部機関が作られることに激しく反対したので、オリンピック kongress は結局、とりあえずはそれぞれのアマチュアの定義に関してIFの権威を認めることに合意した。さらに、以下の排除規定が採択され、すべての者を拘束することになった。

「以下の者はオリンピック大会に参加することはできない。」

1. 自分の競技或いは他の競技でプロである者、或いは承知の上でプロであった者。
2. 給与の損失に対し賠償または補償を受けた者。

アマチュアの原則はオリンピックムーブメントの中心思想として、いわば独立した存在であった。第2項とそれが引き起こした紛争は、19世紀にアマチュアの原則が生まれたときの第一の目的が階級的な障壁を設けることであったことを非常にハッキリ示すことになった。スポーツをするに十分な資産のないものはスポーツをすべきでない、或いは少なくともアマチュアの資格を得て貴族の間入りをする必要はないというわけである。

この二つの規則の上に、kongress は国際競技連盟に対し、トレーナー、演技をして人に見せる体操家、スポーツインストラクター、スポーツ教師、コーチはその活動によって金銭を得ているならば選手或いは審判としてオリンピックに参加できないという制限を守るよう勧告した。試合への長い、疲れる旅もまた避けるべきである。選手はオリンピック大会参加以外には一年に20日以上旅してはならない。

kongress に先立つIOCプラハセッションは、すべてのオリンピック参加者は以下の厳粛な宣誓にサインしなければならないと決議した。

「以下に署名した私は、名誉にかけて、私がアマチュアリズムのオリンピック規則に従ったアマチュアであることを宣誓します。」

しかしIOCにとって選手の名誉にかけた言葉だけでは不十分に思えたので、プラハでの結論に基づく規則で偽証を防ぐための更に厳しい宣誓が制度化された。

選手がオリンピック大会にエントリーするときには、各国競技連盟が当該国際競技連盟の規則に従ってその選手がアマチュアであることを証明する義務を負うことになった。

国際競技連盟の規則が大会参加資格の基礎となった。この証明書はNOCの副署がなければならない。またNOCは選手が国内競技連盟のアマチュア規則にも適合していることを確認しなければならない。国際競技連盟がない場合は大会組織委員会がその役割を果たす。

しかし、プラハで採択された排除基準と国内、国際競技連盟のアマチュア規定との間に存在した矛盾は、宣誓と証明のシステムが如何に複雑になろうとシステム自体を危険に晒さずにはおかなかった。

例えば、IOCの見解では、これはIAAF、FINA、FISAも同じだが、プロは生涯出場出来ない、ところがFIFAとISUは、場合によっては一年の待機期間が過ぎればアマチュア資格を復活することがある。

失った収入の補償をIOCはきっぱりと否定していたが、FIFAは特殊なケースに限って認めていた。一般原則として、IOCは試合の行き帰りの旅行は1年に14日を越えてはならないとしていたが、IAAFは3週間、場合によっては3週間以上の旅費の補償を認めていた。

この点に関して、FIFAとISUには何の規定もなかった。

いくつかの競技では、国内競技連盟のアマチュア規定が同じ競技の国際連盟の規定と一致していないことを考えれば、この問題が次第に注目を集めてきたこと、とくに新しい会長、バイエ-ラツールの注意と引いたことは驚くに当たらない。紛争は差し迫っていた。

2.5.2. テニス連盟離反

1924年のオリンピックテニストーナメントについての国際テニス連盟とIOCの意見の相違はすでに抜き差しならなくなっており、テニス連盟のルールより厳しいプラハでのアマチュア規定の採択は、ますます高まる一連の対立点の一つに過ぎず、両者の離反はますます広がって、1928年以後オリンピックプログラムからテニスが消えることになった。

争いの先鋭な局面は1926年3月19日のILTF総会とともに始まった。

総会は将来のオリンピック参加に四つの条件を付けた。

第一に、IOCにILTFの席を設けること。第二に、ILTFがオリンピックテニスの競技運営に大きな役割を果たす権利。第三に、男女のテニスプレーヤーに対する自分たちのアマチュアの定義を全面的に適用すること。最後に、オリンピックの年でもILTFの通常のプログラムから一種目も落とさないで実施すること。

IOCは、多少ためらいつつも挑戦を受けて立った。会長は、ILTFに対しその態度を改めなければ、少なくともメンバーである各国テニス連盟がオリンピックに参加するのを妨げるのを止めなければ、アムステルダム大会からテニストーナメントはなくなると通告した。

バイエ-ラツールの示したデッドラインは、オランダ組織委員会が大会のプログラムを時間に間に合わせるためにはぎりぎりの1926年末であったが、ILTFは無視した。

オランダNOC会長、IOC委員のアルファート・シンメルペンニク・ファン・デル・オエが問い合わせたところ、ILTFのガレー事務総長は、ILTF所属の各国連盟の参加不参加の問題を討論するのは1927年3月18日の総会だ、と答えた。

それでもなおテニストーナメントを救いたいと思ったバイエ-ラツールは、IOCメンバーと各国NOC会長を督促して大量の手紙によるキャンペーンを行い、各国のテニス連盟がIOCの線に沿って投票するよう働きかけたが、無駄であった。

ILTF総会でオランダ代表团は、時間稼ぎと、少なくとも自国におけるテニストーナメントを守ろうとして妥協案を出したが、過半数は得られなかった。結局、総会は自分たちの提案が受入れられな

い限り、オリンピック大会に参加しないと全会一致で決定した。

IOC会長が二人のILTF代表と話し合った後、第2、第3、第4の条件については譲歩の余地があることを示唆しても、テニス連盟からは和解を示すサインはなんら送られてこなかった。第1の点、IOCに席をという要求は組織の精神と矛盾するのでIOCにとって妥協の余地はなかった。

ガレーは、IOCがILTFのアマチュア規則を本当に認めるというハッキリとした保証を求めた。とりわけ、以前のプロがアムステルダム大会に参加することなどありそうになかったのに、アマチュア復帰の条文について承認を求めた。

バイエ-ラツールはこうした状況をよく知っていたが、そのような大幅な譲歩をする権限は与えられていなかったため、この問題とその討論は次のオリンピックコンGRESSまで延期することを提案した。

しかし差し出されたこの最後のオリーブの枝もテニスの役員は顧みず、ILTF会長が手紙の中でILTFはIOCによって大会から締め出されたのではなく、自ら不参加の決定をしたと強調するに及んで、IOC会長はILTFのアムステルダム大会ボイコットの決定は撤回出来ないことを認めざるを得なくなった。

アムステルダム大会の前夜に出された声明で、IOCは再び紛争における自らの立場を述べたが、それは専らアマチュア問題のせいになっていた。

「国際オリンピック委員会は[...]IOCがプロ選手のアマチュア復帰を認めないためにILTFが全ての会員に対しアムステルダム大会参加を禁じたことを大変残念に思う[...]。オリンピック大会でオリンピックのアマチュアリズムを守るために、またすべてのアマチュア資格を持つ選手に大会を開かれたものにしておくために、IOCはその資格がオリンピック規則に適合するアマチュアだけがオリンピック大会出場できることを想起するよう指摘する。」

2.5.3. 失われた収入の補償についてのIOCとFIFAの意見不一致

国際テニス連盟との紛争は、プラハでの最小限の合意の第一項、つまりプロであった選手には永久にオリンピックのアマチュア資格は与えられないという趣旨の条項、が火に油を祖注いだが、国際サッカー連盟FIFAとIOCの紛争の根は第二項にあった。

第二項によれば、例えば選手が国際試合やオリンピックに参加している間に失われた収入の補償は、アマチュアの理想と調和しない。

この点に関して、1920年代には工業国でさえ、現在我々が享受しているような法的な休暇取決めはなかったことを注意しておかなければならない。

一部の選手は雇い主によって試合に参加するための有給休暇を与えられていた。しかし他の選手は無給休暇を取らねばならなかったし、場合によっては仕事を辞めなければならなかった。これは家族に経済的責任を負っている選手には考えられないことであった。

社会的に低い階層のスポーツであったサッカーではとくに、選手が大会や試合に参加出来るかどうか雇い主の善意にかかっているような状況は改めなければならなかった。

そういうわけで、FIFAは1926年のローマでのコンGRESSで、有給休暇を認められなかった選手には連盟の財源から補償することとし、少なくとも参加の機会を平等にする決議をした。しかしこれをオリンピック大会にも適用しようとするれば、プラハのアマチュアの定義と明らかに矛盾する。この定

義によれば、雇い主が与えた有給休暇は罰せられないが、連盟による支払いは禁止事項に触れる。

プラハ kongress の決議に縛られるIOCは介入せざるを得ないのは明らかであった。

会長は規則によって、サッカーをオリンピックプログラムから排除するという脅しをかけて、FIFAの決議の即時撤回を求めることもできたろう。しかしそのような動きは、サッカー試合は経済的に大きな貢献をしていたので、オリンピック大会そのものの存在を危険に晒しかねなかった。それに加えて、もしオリンピックから締め出されれば、FIFAはオリンピックに対抗する自分たちの世界選手権を始めたであろう。

そうしたわけで、先ずFIFA会長、ジュール・リメが理事会メンバーと共に1927年8月8日のパリのECの会議に、交渉のために招かれた。

バイエラツールは冒頭のスピーチで先ず、プラハの決定がどのようになされたかを長時間かけて説明し、IOCの立場を守った。しかし彼は最後に、この会議で双方にとって受け入れられる解決策を見いだすよう努力しなければならないという融和的な勧告で締めくくった。

長い議論の末、執行委員会は、失われた収入の補償がその選手に直接ではなく雇い主に支払われるという条件で、FIFAの新しい規則を認めると発表した。雇い主はその金を使って有給休暇とするわけである。この公式の方策によってプラハ決議の文言は遵守することが可能になり、また実際は有給休暇をもらっていないながら連盟から更に取りろうとする選手の詐欺を防ぐという利点を付け加えることになった。

二人の執行委員会メンバー、ジグフリード・エドストレームとレジナルド・ジョン・ケンティッシュが妥協案に同意することを拒否したばかりでなく、IOCは、NOCと競技連盟に対する弱腰を厳しく批判されることになった。またECは、そのような動きをすることで越権行為をしていると非難された。とくにイギリス NOCがひどく憤慨した。そしてイギリスサッカー連盟は事実上FIFAを脱退した。

1927年10月、執行委員会はローザンヌで再び会議を持ち、問題に取り組んだ。

ECは、越権行為という非難に対しては、セッションの間にはそのような問題について拘束力のある決定が出来るかと反論した。大会の前にこの種の問題を解決するために会議を招集するのは実際的ではなかつたろう。

しかしECは、もう一度、失われた収入に対する補償についてのFIFAの個々の決定の詳細を示して、風波を静めようとした。

選手はすべての必要な書類を自分の国内競技連盟に提出しなければならない。国内競技連盟はFIFAに報告し、すべての関係事項を説明する。補償は妻帯者で90パーセント、独身者で75パーセントを越えてはならない。支払いは国際試合と国内選手権の準決勝と決勝のために旅行した場合のみ認められる。さらにFIFAもまたそれぞれの国の選手について旅行日の最大数を定めた。最大限は20日であった。

アムステルダム大会の間に開かれた次のIOCセッションで、FIFAとECの協定はIOC内部からの鋭い批判に晒された。

バイエラツールは、雇い主を通じて補償するというFIFAの現在のルールはプラハでは討議されなかった新しいものだとして決定を正当化した。執行委員会はそれがIOC規則と両立するという大

胆な決定を下したわけではなく、例外的な扱いとしてアムステルダムでサッカートーナメントができるようにしただけだ、とバイエ-ラツールは主張した。

長い激しい議論の末、結局IOCはFIFAがオリンピックルールに違反する形でアマチュア規則を変更したことに遺憾の意を表明した。

そうしたわけでIOCはECの妥協案を認めず、もしFIFAがIOC規則に適合するようそのルールを変更しなければオリンピックプログラムからサッカーを排除するとFIFAを脅した。

1929年のローザンヌセッションで、失われた収入に対する補償の問題は再び議題に上った。バイエ-ラツールはオープニングスピーチの半分以上を使って、アマチュア概念との関係で「失われた収入に対する補償」と「有給休暇」を定義しようとした。

IOCは二日にわたって議論したが、「最終」結論を1930年のベルリン kongress で出すという決定以外は何の決議もできなかった。

ベルリンで、テオドル・レヴァルト委員長の委員会がこの問題を検討し、以下のテキストを総会の投票にかけることができた。

「I. 所属する国際競技連盟の規定とルールによって資格を認定された選手は、オリンピック大会でアマチュアと見なされる。但し1925年のプラハオリンピック kongress で採択された決議に従って資格認定されることが必要である。すなわち...

オリンピック大会に参加する選手は以下の条件を満たさなければならない。

1. 選手は自分がエントリーした競技、或いは他の競技でプロであってはならないし、プロであったことがあってもならない。
2. 選手は給与の損失に対する賠償或いは補償を受け取ったことがあってはならない。

II. 給料の支払われる休暇を与えることは、支払いが雇い主によって行われ、その雇い主がいかなる競技連盟、協会、クラブによっても賠償を受けない限り、給与の損失に対する補償とは見なされない。」

草案の第I点は総会で、短い議論のあと、90対20で採択された。

しかし第II点は白熱した議論を呼び、三回にわたって論議された。

提案された修正案はどれも採択されず、kongress は「有給休暇」問題についての結論を執行委員会と代表団評議会(各オリンピック競技団体代表一名からなる)の合同会議に任すしか方法がなかった。この代表団評議会はわずかに数日前に規則に入れられた新制度であった。kongress はこの委任について69対12で同意した。こうしてkongress はそのために招集された主要議題の一つに結論を出すことができなかった。

しかしレヴァルトの草案とその議論の方向から、もはや問題のポイントは、FIFAとECの妥協案の間接的補償手続きが受け入れられるかどうかではなく、有給休暇それ自体が収入の損失に対する補償の一形態と見なさるべきかどうか、であることは明らかであった。

おそらくこれが1930年10月11日にパリで開催されたECと代表団評議会の第一回合同会議にFIFAが代表を送らなかった理由であろう。

そこではホッケー連盟代表、フランツ・ライヘル提案に基づいて、比較的速やかに結論が出された。それによれば、選手は以下によって大会に参加できる。

「選手は給与の賠償或いは補償を受けたことがあってはならない。仕事や職業の通常の条件の

下に与えられる休暇、或いはオリンピックの際と同じ条件の下に承認された休暇は、失われた給与の直接的間接的賠償に至らない限り、第2項の規定の範囲内には入らない。」

この決定は結局、オリンピックの舞台からサッカー選手が一時的に姿を消すことを確定した。彼らはこの機会を捕らえて、その年に第一回世界選手権をモンテビデオ(ウルガイ)で開催した。

1932年のロサンゼルスオリンピック大会にサッカーがなかったことは、実際のところアメリカ人がどの道サッカーには関心がなかったので、とくに問題にはならなかった。

1936年以降は、FIFAがそれまでに規定からアマチュアリズムに関する文言をすべて削除していたので、オリンピックプログラムにサッカー試合が復帰することになった。

しかし今や、IOCのアマチュア規定に適合する規則を持つ国内競技連盟のアマチュア選手だけが参加できることになったのである。

2.5.4. 「セミプロ」に対する戦い

こうしてアマチュア問題の二番目に大きな争点も1930年の決定で解決された。

しかしそのように決定しながら、オリンピックムーブメントはエリートのオリンピックアマチュアリズムの象牙の塔から踏み出す機会を逸した。このエリートアマチュアリズムは高貴な生まれ、或いは特定の雇い主の善意から生じる特権を擁護するものであった。そしてそれに続く時代、体裁を整えたアマチュアリズムが必ずしも真の高貴さを保証するものではないという現実を受け入れねばならなかった。

はやくも1932年、フィンランド人選手、ヌルミのケースが大きな注目を集めた。

ヌルミは旅費について嘘の報告を出し、それで得た金を財政的に困窮していたフィンランド連盟に寄付した。このため、ヌルミは国際アマチュア陸上競技連盟から生涯出場停止の処分を受けた。

このような規則悪用を防ぐため、IOCのECと代表団評議会は1933年6月初旬ウィーンで、次のIOCセッションのためにIAAFの提出した動議「セミプロ主義と戦う手段」を協議した。セッションは他のいくつかの修正と共に受け入れた。

その結果、選手の参加と旅行に関する通信と交渉は国内競技連盟だけが行うことになった。選手自身は支出を補う支払いやかかった費用の払戻しを受け取ることは許されなくなった。選手は必要な旅行記録証書を与えられるだけになった。

宿泊食費は一日当たり1イギリスポンド(ゴールド)が限度となった。

またアマチュアは国外スポーツイベント出場のために21日を越えて休むことは許されなかった。但し、オリンピック大会、国際選手権や国際試合はこの日数の計算から除かれた。この時また、オリンピック宣誓とオリンピック大会の前に全選手がサインしなければならないアマチュア宣言についても厳しい確認がされた。もし選手がたとえわずかでもアマチュア規則に違反していたら、国際、国内競技連盟、NOCはサインするのを拒否しなければならない。

NOCは、自国の選手に対してオリンピック宣誓の重要性について通告し、虚偽の宣言が選手だけでなくその国にとって如何に不名誉なものとなるかを指摘する義務を負った。

最後に、このカタログはアマチュアが慈善目的或いは愛国的目的以外の競技でプロと試合する

のを禁じていた。その場合でも当該国内競技連盟の特別許可が必要であった。

しかし予想通り、アマチュア資格についてのルールが複雑になっても違反の数は減らず、1934年5月7日のブリュッセルでの国際競技連盟との会合でバイエラツールは再び悲痛な嘆きを繰り返さねばならなかった。競技連盟は彼の見解では既にアマチュアでない選手をアマチュアとし、選手はテーブルの下で賞金を受取り、職場では架空のポストについていた。

一週間あとのアテネのIOCセッションでは更に重大な問題が起こった。

不服申し立ての一つは今日の観点から見れば極めて不思議に思えるし、IOCの上流階級に対する相変わらずの態度を記録に留めるものである。

馬術連盟は、乗った馬の持ち主でない騎手は賞を自分のものにするにはできず、馬主に渡さなければならない、と告げられねばならなかったのである。

射撃選手もまた不満を訴えた。射撃競技は賞金試合の流行のために1928年のアムステルダム大会のプログラムから外されたのに続いて、1932年のロサンゼルス大会に参加した選手のうち9人は賞金のでる大会に参加した疑いがかけられていた。国際射撃連盟はこれを否定していた。

しかしこの悪弊は明らかにあまねく行われていたし、1936年ベルリン大会には射撃にぜひ参加してほしいという要望が強かったために、IOCは1935年、オスロの次の会議で、かつてあれ程強く反対した条項を更に緩めたアマチュア復帰条項に賛成した。

つまり1936年のベルリンでは1934年8月1日以降賞金を受け取っていない選手は参加できることになったのである。しかし原則の問題として、IOCは既に他の競技にも広がっていた現金と高価な賞品の害をもう一度押さえ込もうとして、オスロ会議の終わりにこの件について一つの決議をした。

「IOCは、競技した選手に対して形を変えた賞金が報酬として与えられていることを知ったので、各国オリンピック委員会に対し、そのような賞が広がらないようにすること、選手がそれを受け取ればそのことによってアマチュア失格になることに選手の注意を喚起するよう求める。もしそのような賞が与えられた場合には、それをスポーツの発展のための基金として利用する競技連盟に返還することができる。」

2.5.5. スキーのインストラクター、ジムのマスター、スポーツライター、ステートアマチュア

1936年のガルミッシュパルテンキルヘン冬季オリンピック大会のプログラムにアルペンスキー種目が加えられて、アマチュアリズムについての議論に新しい舞台が開かれた。

四年前に、国際スキー連盟FISはパリのコンGRESで、支払いを受けてスキーを教えている選手はアマチュアと見なされ、国際試合に出場出来ると決めていた。

この決定について、ノルウェーのトマス・フィアーンリーがオリンピックアマチュアルールに適合することを確かめるために、オスロの1935年セッションの議題にのせるよう働きかけたとき、バイエラツールはこの決定についてアベリー・ブランデーからすでに聞かされていた。オスロでIOCは、スキーインストラクターはオリンピックでのアマチュアではなく、オリンピック大会への参加は許されないと結論した。

IOCはバイエラツールにそのようにFISに通告するよう指示した。

この禁止は即座に発効した。そしてこのことは、とりわけオーストリアとスイスのベストスキーヤーが

ガルミッシュパルテンキルヘンに参加できなくなることを意味した。

1936年2月14日、冬季大会がまだ続いている間に、国際スキー連盟は自分たちのアマチュアルールをIOCが認めないかぎり、次の冬季大会には参加しないと決めた。

そしてその代わりに1937年のはじめに、自分たちで世界選手権を開催すると決めた。

会長のノルウェー人、ニコライ・エスガードは次の日、ECの会議でこの決定について説明した。その後の往復文書のやり取りは二つの立場の間の距離を縮めることは出来ず、IOCは1936年ベルリンセッションで拒否を再確認した。

ベルリンでIOCはまた、前もって、国際陸上競技連盟、ハンドボール連盟、水泳連盟、漕艇連盟、ボクシング連盟からの手紙を受け取っていた。これらの連盟は長い時間を無駄にした議論に疲れて、今後アマチュア問題についての議論には加わらないと宣言していた。アマチュアリズムの理想の歪曲に対する戦いをさらに強めなければならないと考えていたIOCはそうした忌避を黙認するわけにはいかなかった。

それは丁度、エドストレームが、純粋なオリンピックの原則にのっとった場合の新しい危険の種に気がついたところであった。彼は「職業的なスポーツライター」がアマチュアルールによって大会参加を拒否されるべきでないかどうかを研究する必要があると主張した。

国際体操連盟FIGはジムのマスターの1936年大会への参加を認めていたが、エドストレームの提案で、この処置の適法性についての調査が、ワルシャワの1937年セッションの議題に上っていた。

IOCはこの問題をスキーのインストラクターの問題との関連で長い時間をかけて議論した。しかしFIGはジムのマスターがスキーのインストラクターとは違うことをはっきりさせることができた。マスターは学校で他の科目と一緒に基礎的な体育を教えている者と理解されたからである。

そこでエドストレームは第三の資格ルールをつくるように指示された。そのルールは二日後にアマチュア規則に付け加えられた。

「オリンピック大会に参加する選手は...

3. 体育またはスポーツを教えることによって報酬を得る教師であってはならない。この規則の例外となるのは教師としての通常の仕事の中に体育またはスポーツの基礎的な教育が含まれている場合である。但しこれが主要な仕事であってはならない。」

この明確化によってスポーツだけを教えているスキーインストラクターのような教師はアマチュアとは言えなくなった。IOCはまた1925年に採択された選手の厳粛な宣誓を拡充する必要があると考えた。

「下に署名した私は名誉にかけて、私がアマチュアリズムのオリンピックルールに従ったアマチュアであることを宣誓します。」という文言に以下の句が付け加えられた。

「そして私が、オリンピックルールが要求する条件を満たすことを。」

IOCはまた、スポーツに対する国の影響力の増大に大いに苛立っていた。

オリンピック選手が国から贈り物を受けているという事実だけでなく、彼らを国の威信を高めるために、或いは単に特定の政権の宣伝のために使いたいという欲求が、ステートアマの初期の形を

発生させていた。これはアマチュアについてのオリンピックの考え方に対する新たな挑戦であった。

実をいえば、IOCは、1937年にフランス自転車連盟とフランスNOCが何年も続いている失われた収入に対する補償の問題を提起したときに、プラハとベルリンでの決定に照らして何の行動も取る必要を認めなかった。しかしIOCはそのときすでに、アマチュア問題全体を見直し、次のセッションに報告を提出するための委員会を設けていた。

この委員会は1938年、カイロで10の個別の問題のリストを提出した。セッションは順にそれと取り組んだ。

「政治目的のためのスポーツの国営化」と「ステートアマ」の問題がリストの上位にあがっていた。しかしIOCはスポーツを国家宣伝のために使うことや国の費用で準備した選手に対してハッキリした立場を取れなかった。

その他の点については、1933年に採択された規則の個々の条項が見直され、修正され、拡張された。しかしそれと国が費用を持つスポーツとの関係は考慮に入れられなかった。こうしてトレーニングの目的のために「学問であれ、仕事であれ選手のなすべきことを二週間以上妨げるような実践をすること」は、オリンピック優勝者がプレゼントを受け取ることと共に禁じられた。

どんな競技であれアマチュアとして出場しようと望む者は、他の競技にプロとして参加することは禁じられた。同じように、「スポーツにおける業績によって」「ジャーナリズムの一部門や劇場や映画や放送に」地位を得た選手はアマチュアではない。

新しいのは、アマチュアはドーピングをしてはならないと述べたルールであった。しかし古い旅費規定は事実上変わらずに残った。

最後から二番目のポイントで、地元のスポーツ組織は「国際試合に参加したために欠勤した選手が元の職場に復帰することを保証するために雇い主と金銭的取決めをしてはならない」と決められていた。というのはテキストにも述べてあるとおり、オリンピック大会参加は雇い主にとっても「大変な名誉」と見なされるべきものだからである。

最後の問題の解決に当たって、IOCは失われた収入に関して小さな譲歩をした。

もし選手が家族にとって唯一の働き手であるなら、「個別調査の後に」雇い主を介して補償を支払うことができる。」

委員会は全会一致ではなかったが、14対8の過半数でバイエラツールの提案したアマチュア条項の修正案を採択した。問題の文章は次の通りである。

「オリンピックに参加する選手は...

2. 給与の損失に対して賠償または補償を受けてはならない。第2項は以下の場合には適用されない。休暇が通常の職業上の条件の下に取られている場合、休暇が同じ条件でオリンピック大会の際に与えられた場合、但しそれが失われた給与の、直接或いは間接のカモフラージュされた償還となつてはならない。そして、個人的な調査の後、非常に例外的な許可が与えられて、家族にとって唯一の働き手である選手の欠勤の間の妻、母、父に対する補償が直接雇い主に支払われる場合。」

しかしカイロセッションのプログラムはアマチュア問題をまだ解決していなかった。

FISによって要求されているスキーインストラクターのアマチュア資格を巡る紛争は1936年の決定以来熾りつづけており、国際スキー連盟はヘルシンキのIOCセッションの一月前に、スキーインストラクターは、再びアマチュアとして参加できるという決議をした。

エスガード会長は、未だに1932年のスキーインストラクターの参加資格についての最初のFIS決議の根拠を納得していなかったのだが、今回は、もし提案が否決されたら辞任すると脅しをかけた。その結果アマチュアの考え方についてより狭い解釈の適用を望む多くの会員国から個人的に厳しく批判されることになった。

しかしIOCは国際スキー連盟のボイコットの脅しに屈することなく、1938年3月13日、1940年の冬季大会からスキー種目を除く決定をした。

2.6. オリンピック大会

2.6.1. 緒言

IOCの活動の焦点は常に大会であったし、現在もそうである。そしていつの大会であれその開催都市を選ぶのは最も重要な仕事であった。

具体的な準備はその都市の組織委員会の仕事になる。総じて言えば、IOC、EC、会長はこの段階ではオリンピック憲章のような基本的な事項にのみ介入してきた。

バイエラツールの時代に逆上れば、開催地の決定がどのくらい前に行われなければならないかについてのルールはなかった。そして立候補に伴う費用は今日の額とは同日の談ではない。立候補の届け出は時として、市長からIOCへの、市の長老たちの同意と、競技場がすでに在るか、これから造らなければならないかを通知する一通の手紙だけということもあった。IOC委員に働きかけようとか、肝心のIOCの会議に代表を送ろうとかいう習慣はなかった。

立候補届けは関心を持つ沢山の市、と言うか、少なくとも立候補の可能性のある市としてその名が挙げられた沢山の市からきた。しかしその頃には、IOCは最後には二つの真剣な候補だけが残るようにすべきだと考えるようになっていた。

一方、最初の立候補はたいていの場合、その市の順番がきたら成功することを希望している、或いは少なくとも望んでいることを示す以上のものではなかった。

ブダペストは、1894年に最初躊躇していたアテネの代わりにバックアップ可能な会場として名前が上がっていて、その後ほとんど毎回立候補したが、選抜候補者リストに入ることはできなかった。

2.6.2. アムステルダム 1928年

2.6.2.1. 開催都市指定

アムステルダムが最初に名をあげられたのは、アントワープ大会の際のIOCセッションで、ロサンゼルスやパリを含む13の都市と一緒にあった。

1921年のローザンヌセッションは、クーベルタンの提案で1924年と1928年の開催都市を選ぶことを決めた。クーベルタンはこうすることによって会長として最後の大会をパリに持ち帰ることを望んだのである。その結果、長い間1924年大会の有力候補であったアムステルダムの開催は後に回さ

れることになった。

これには準備期間が長くなるという利点があったのは事実だが、一方でオランダの反オリンピック派に宣伝のための十分な時間を与えることにもなった。

はやくも1921年10月10日、70代の男爵、F.W.クリスチャン・ファン・トゥイル・ファン・セアルースケルケンの下に暫定組織委員会が設立された。男爵は1898年以来のIOC委員、1912年オランダオリンピック委員会設立以来の会長であった。会長就任以来、彼は首都への招致の主唱者であった。最初は1920年大会を目指した。

組織委員会が本格的に組織されて、ピーター・W.シャルーが副会長に、ゲオルグ・ファン・ロッセムが事務局長になった。ファン・トゥイル男爵は短い病のあと1924年2月13日亡くなった。オリンピックに関する二つの会長の地位はアルフェルト・シンメルペンニンク・ファン・デル・オエ男爵(1880-1943) が継いだ。男爵は次の年、新しく設けられた二つ目のオランダのIOC委員になった。シャルーは既に1924年ファン・トゥイルの席を引き継いでいた。

1923年以後、準備についての報告はIOCセッションと執行委員会の議題としていつも提出されていた。それにはほとんど欠点をみつけることはできなかった。議事録に残る最も印象的な計画変更の要求は、アメリカ人チャールズ・シェリルの200メートル競走を直線コースにせよというものである。この場合当然のことながらとくに発言の注目されるIAAF会長のエドストレームはこの提案を支持したけれども、IOCは受け入れなかった。

しかし賢明なオランダ組織委員会は、絶えず出てくるこの種の提案への回答を、競技場建設が進んで事実上実行できなくなるまで引き延ばした。

2.6.2.2. 大会についてのオランダにおける争い

1924年11月、ローザンヌにおける執行委員会会議は突然、1928年大会と1925年3月にハーグで予定された会議の移転について論議しはじめた。

この会合は実際には指定の日にパリで開かれたのだが、1924年大会に関心を示していたロサンゼルスに1928年大会を代わって開く可能性があるかどうか打診することを決めた。

この異常な動きは、オランダ議会が大会予算を拒否したためであった。

批判派は、これまでの反対派やこの際の新たな反対派と同じく、資金は差し迫った住宅不足などの社会問題の解決に振り向ける必要があるといった主張をした。宗教界からも抵抗があった。教会はオリンピックの異教的起源を不快に思った。そして日曜日に競技することと女性の参加を支持できないとした。しかし教育大臣、テオドル・ド・フィッセ(1851-1932) は、彼自身神学者であったが、断固オリンピックを支持し、反対派の勢いを削ぐために組織委員会と日曜日には競技をしないという取決めをした。

それでも予算案が第二議会で必要な多数を取れなかった時、ド・フィッセは辞任した。彼は三年後、大会開会式で説教するよう招かれたが、その時いささかの満足感を得たであろうことは疑いない。

オランダの人々の大多数は、ド・フィッセのように、オリンピックに賛成であった。

新聞は第二議会の決定を批判し、政治家のためにオランダの国際評価が傷ついたと述べた。クーベルタンはこのエピソードが起きたとき、会長の任期の終わりに近づいていたが、皮肉をいう言

う誘惑に勝てなかった。

「... 第9回オリンピックはしばらくの間、敬虔主義者たちのために非常に危険な状態にあった。彼らはこのオリンピック復興の異教的性格に対して武器を取って立ち上がり、法案通過阻止に成功した。そのため一時、このオリンピックはちゃんとスタートする前に、記録を破るのではないかと思われた一愚劣さの記録を一である。」

しかし開会式と閉会式の、クーベルタンノのスポーツ教とオリムピズムの哲学的基礎の解釈による礼拝のような要素をつぶさに見れば、清教徒的な傾向を持つオランダ改革派教会側のオリンピック大会に対する批判的な留保はほとんど驚くに当たらないと結論しないわけにはいかない。

大会に対する支持は国内オリンピック委員会によって急速に盛り上げられた。

1925年5月9日、オランダの新聞は「すべてのオランダ人男女」に向けての献金のアピールを載せた。この呼びかけは直ちに、150万ギルダーの献金を集めた。

こうして、1925年5月末のプラハのIOCとオリンピックコンGRESSでは、もはや大会をオランダから引き上げることなど問題にもならなかった。そしてIOCはスタジアムの再建や選手村の提供のような問題について議論することができた。

2.6.2.3. プログラムの過密化

アテネ大会を除くほとんどの大会で、試合が非常に長い期間にわたったので、プログラムが問題になってきた。

その結果、競技種目のまとまりが観客にとってハッキリせず、本来のインパクトが失われた。そこでプラハのテクニカルコンGRESSは「プログラムの削減」と「大会の組織」の問題を討論し、適切な決定によって状況を改善しようとした。

しかしそれまでと同じように、会議は拘束力のあるルールの合意ができず、大会を二週間に制限する勧告と、必須競技の一覧表を造る試みで満足しなげらなかつた。

アムステルダムに関しては以下のスポーツのリストが決定された。

「陸上競技

体操競技

自衛競技(ボクシング、フェンシング、レスリング)

水上競技(漕艇、水泳)

馬術競技(調教、野外騎乗)

複合競技(近代五種)

フットボール(サッカー)

芸術競技(建築、音楽、文学、絵画、彫刻)

自転車(ロード、トラック)

重量、ダンベル競技

ヨット(モノタイプクラス、6メートルクラス、8メートルクラス)

ゲーム競技(ホッケー、ローンテニス、水球)

馬術ゲーム(ジャンプ)

すでに説明したように、射撃とテニスはアマチュアルールに従わなかったためにプログラムから削除されていた。サッカーは差し当たりこの運命を逃れていた。

ボクシングについては、オランダでは公開ボクシング試合は違法であるため問題があった。そのためボクシング競技は観衆なしで行われることになる。

しかしリスボンの1926年セッションでシンメルペンニク男爵が提出したプログラムは、IOCは長すぎると考えた。それは大会の中心部分として1928年7月7日から22日まで16日間を予定していた。これに続く組織委員会からのもう一日増やす要求は拒否されたが、ECは大会開会式と閉会式の日も競技を行う妥協案に同意した。

1926年8月のハーグでの会議は、サッカーとホッケーを5月と6月にやるスケジュールを不本意ながらも承認した。

こうしてアムステルダム大会もまた、期間が延びてしまった。とくに1927年はじめに、大会の実際の核となる期間が三週間に戻されたからである。

結局、大会の期間は5月17日から6月13日までと7月28日から8月12日まで、プラハで決められた上限を越えて、6週間になってしまった。プラハの決議は「大会の期間は4週ンを越えてはならない。可能なら3週間とする。すべての競技はこの期間内に終わらなければならない。」というものであった。

もし6月12日から8月12日までのオリンピック芸術展示を勘定に入れれば、全体の期間はほとんど3カ月になる。執行委員会によって指名された芸術競技の審判がほとんどIOC委員だけであったことは、IOCがこの種目とメダルのデザインを軽視していたわけではないことを示している。しかし何故専門家が相談に預かっていないのであろう。

ECはハーグでの会議を利用してアムステルダムを訪れ、スポーツ施設を巡り大会準備の建設作業の進捗状況をチェックした。続く会議でエドストレームは自転車のトラックをスタジアムから取り除くよう要求した。多分、一つには自転車のためにスタジアムの使用頻度が増え、スケジュールを短くする妨げになるからであったろう。しかしシンメルペンニクはそのための経費を理由に断った。

IOC、執行委員会、大会組織委員会の間に、その他にはとくに大きな意見の相違はなかった。

1927年のモナコセッションで大会プログラムの詳細とその実施についてもう一度最後に議論された。結論として、アムステルダム大会はメダル授与式が大会最終日に行われる最後の大会になったこと、初めて女性が陸上競技に参加したこと、オリンピック聖火が初めてスタジアムに灯されたことに留意されるべきであろう。

2.6.3. ロサンゼルス 1932年

2.6.3.1. 開催都市指定

1920年、アントワープのセッションにIOCの創立メンバー、ウィリアム・スローンはロサンゼルスにウィリアム・ガーランドを伴った。ガーランドは素晴らしいプレゼンテーションによってIOC委員を説得し、1928年の大会をカリフォルニアに持ってこようとした。

しかし、1924年の大会が未だ決まっておらず、クーベルタンは既に1928年についてはこの段階では決定しないという考えを固めていた。

ガーランドは、しかし、大変良い印象を残したので、1922年1月の郵便投票でIOC委員に選ばれた。ロサンゼルスメモリアルコロシアムが完成すると、ガーランドは1932年のローマセッションで再び招致運動を行った。今回はIOCにとっても決断は容易であった。

パリが1924年大会に選ばれ、アムステルダムが1921年のローザンヌセッションで1928年大会に決まっていたので、セッションは9年も先立って、ロサンゼルスに1932年大会開催都市とすることに同意した。セッションは喝采による熱狂的賛成で決し、その他の候補についてはあまり考慮しなかった。クーベルタンはこの件について次のように書いている。

「主張者（我々の同僚、W.M.ガーランド）の熱心さと情熱に加えて、ロサンゼルスは三枚の強力なカードを持っていた。第一に、オリンピック準備の進捗状況、これは成功のための貴重な保証である。次に、政治的、社会的イベントの観点から見た有利な状況。そして最後に、アメリカ合衆国のスポーツマンのアテネ以来の努力と過去のすべての大会における輝かしく数多くの参加に対して、何らかの感謝の意を表すべき時が来ていた。」

2.6.3.2. 東部諸州の懐疑

アメリカのアマチュアスポーツ組織はロサンゼルス市の選出にちっとも興奮しなかった。というのはアメリカのスポーツの中心は依然東部海岸地帯にあったからである。

そこに本拠を持つ役員は自分たちが軽んじられたと感じ、西部の同胞のこの種のイベントを実施する能力に疑問を持っていたので組織委員会を乗っ取ることすら考えたくらいである。「彼らは、この経験のない地方がこれほど大きなスポーツイベントを扱うことができるかどうか大いに疑問を持っていた。」とアベリー・ブランデーは回想している。

ブランデーのアメリカスポーツ界のリーダーとしてのキャリアは始まったばかりであった。彼は自分でロサンゼルスに「チェック」しに行き、組織委員会がよく機能していることを確かめることができた。IOCは最初から、東海岸の役員たちとは違った見方をしていた。

クーベルタンがパリの問題や、公共基金拒否が1928年のアムステルダム大会を危うくする危険に気がついた時には、いつもロサンゼルスが万一の時の頼みの綱となっていた。

実際のロサンゼルス組織委員会は1928年2月10日まで設置されなかったが、その前身として、第1次世界大戦の直後につくられた非営利団体、コミュニティー開発協会があった。何よりもこの協会はスタジアムがその一部である大きなレジャーセンターを建てていた。この協会の会長はガーランドであり、彼は今や組織委員会の会長となった。

2.6.3.3. 高い旅費とオリンピック選手村

IOCは1927年からロサンゼルス準備状況に定期的な関心を払いはじめた。

最初の段階では、この責任は明らかにガーランド自身あるいはコミュニティー開発協会全体が引き受けていた。会議では、ガーランドとシェリルが進行状況報告を行った。彼らはめったに、必要な長旅を厭わなかった。そして普通、組織委員会の事務局長“ザック”ファーマーのような地位の高い補佐官が同伴した。

1927年モナコで、彼らははじめて、大会がワシントンに移されるという噂を否定しなければならなかった。シェリルはこの時アメリカにいたガーランドに電報を打ってIOCを安心させるよう頼んだ。組

組織委員会とIOCとの間のコミュニケーションに関するかぎり、二人のアメリカ人の旅行を厭わぬ態度がヨーロッパとロサンゼルス間の大きな距離をうめていたが、IOCは選手にとっての長い高価な旅を心配していた。

組織委員会は当然のことながら、多くの参加選手と訪問者にアメリカの西海岸への旅をしてもらいたかった。そういうわけで、最初に焦点となったのは大会への最善の最も安上がりの旅をどう組織するかであった。

費用の問題は、1929年10月25日の「ブラックフライデー」で世界経済が危機に襲われたとき一層深刻な問題となった。しかし景気後退は大会開催を深刻な危機に晒すことはなかった。財源ははやい段階からローンと政府保証によって確保されていたからである。

1927年のセッションで、シェリルがヨーロッパの参加者を汽船にのせパナマ運河経由でロサンゼルスへ連れてくる案を議題にのせた。次の年アムステルダムで、二人のアメリカ人はロサンゼルスが既に250万ドルも使っていることを指摘し、汽船会社、鉄道会社と運賃値引き交渉ができるよう早く参加者の数を見積もってくれと要求した。

しかし一年経ってもこの問題には少しも進展がみられなかった。エドストレームがガーランドに詳細な要求を出し、船と鉄道の運賃は少なくとも50パーセント引きになるよう、宿泊費も安く納まるよう、直ちに交渉を始めることを期待すると通告していた。

1930年10月、執行委員会は次のような結果を知らされた。値引き交渉の結果、旅費の合計は一人およそ150ポンド（およそ3,000ドイツマルク、15-18,000フラン）になった。

ロサンゼルス滞在の費用を節減するため、組織委員会はオリンピック選手村をつくる提案をした。アムステルダム大会では同じ提案は拒否されたが、今回はほとんどの国が賛成した。選手村が建てられ大歓迎された。例えば、ドイツオリンピック委員会の報告書には次のようにある。

「オリンピック選手村がアメリカ人のホスピタリティーの第一印象をつくりあげた。

物惜しみせず、清潔で、部屋の備品は十分に備えつけられていた。この選手村で快適に感じないような者がありとすれば、その人物の感受性の欠如を哀れまざりにはいられない。素晴らしい環境、輝かしい太陽、涼しい風、晴れ渡った満天の星空、眼下の街の眺め、これだけでも滞在は深い喜びの源となる。スポーツの世界が一つになり、しかもスペース的にはお互いを煩わさない程度に離れていた。」

選手村は太平洋を見晴らす小高い丘の上であり、700 の小さな木造小屋からなっていた。一軒当たり四人の選手が入った。同じように選手と一緒に住む施設は1906年と1924年に既に在ったが、とてもロサンゼルスと比べられるようなものではなかった。

この成功によって、オリンピック選手村はそれ以後の大会では必ずつくらねばならないものになった。そして間もなく選手村は、ほとんど開会式や閉会式と同じようにオリンピックムーブメントの欠かせぬ一部となった。

費用は一人一日 2ドルであった。女子選手は、1932年には入村できず、1936年ベルリン大会ではじめて入村することになるのだが、比較的上等なホテルに泊まり、同じように安い宿泊費を払っただけであった。差額は組織委員会が負担した。この時個々の選手の滞在費は一切切で、アムステルダムで払ったものよりも大幅に安く済んだ。

2.6.3.4. ベルリンオリンピックコンGRESSとプログラムについての決定

オリンピック大会の競技プログラムは、大部分1930年のベルリンオリンピックコンGRESSの決議で決められた。そしてこのプログラムはロサンゼルスではじめて実施された。

コンGRESSの準備のために1929年春、ローザンヌでIOCセッションが開かれ、将来の討論のために以下のリストがつけられた。

プログラムの統一。大会期間の15日以内の制限(三回の日曜日を含む)そして一つの種目に一国から三人以内の制限。個人種目で個人と団体の順位を同時に付けることの禁止。そして最後に、女子種目の廃止。この最後の提案は執行委員会の会議で拒否されてきたものだが、オリンピックプログラムに責任を持つベルリン委員会の小委員会が草案を書き、全体会議の承認を求めて提出した。小委員会のメンバーは8人のIOC委員、13人のNOC代表、15人の国際競技連盟代表からなっていた。

会議はアマチュア資格についての最終結論は出せなかったが、プログラムに関しては、何十年も有効であり、いくつかは今日も適用されている重要な決定にこぎ着けた。

「大会の期間は開会式を含んで16日を過ぎてはならない」が最初の議決であった。

これはわずか数年前、1990年の東京におけるIOCセッションでハッキリと確認された。競技種目についてのIOC提案は委員会と全体会議で、無修正で採用された。

「オリンピック大会の公式プログラムは、IOCの同意による区分けに従って定められる。それは以下のものである。

陸上競技、体操、防衛競技(ボクシング、フェンシング、レスリング、射撃)、水上競技(漕艇、水泳)、馬術、総合競技(近代五種)、自転車、重量挙げ、ヨット。

芸術競技(建築、文学、音楽、絵画、彫刻)。

そして以下の運動ゲーム、即ちフットボール(サッカーとラグビー)、ローンテニス、ポロ、水球、ホッケー、ハンドボール、バスケットボール、ペロタのうちから組織委員会は開催可能なものを選ぶことができる。但し、大会の公式期間中に決勝が終わらなければならない。

各国際競技連盟は IOC執行委員会の同意を得て、それぞれの競技にどんな種目が含まれるかを決めなければならない。

IOCは、IOCの原則に適合しないアマチュアの定義を含むどんな競技種目もプログラムに含めない権利を留保する。」

各競技で行われる個々の種目に関しては、当該国際競技連盟がIOCに提案しなければならないのだが、この件に関して国際連盟に節度を守るように求めたコンGRESSの勧告はほとんど耳を傾けられなかった。大会の期間とプログラムが広いコンセンサスを得た一方、個々の競技で参加者数を制限しようとする試みは手厳しい反対に会った。

しかしバイエラツールは結局「一国三人の代表」の提案を押し通すことができた。

さらに、将来のメダル授与は、これまでのように最終日に開催国の元首が纏めて渡すのではなく、競技が終わったらすぐ会場で行われることになった。

2.6.3.5. 少ない参加とアメリカの圧勝

以上の決定はロサンゼルスで初めて適用された。大会期間がわずか16日になったことは、外国

からやって来る国にとって旅行を一度だけ組織し費用を捻出すればよいので有り難いことであった。

新しく採用された参加者の数の制限は、不況のために多くの国が少数の選手団しか送らず、参加しない国もあったので、必要ではなかった。多くの種目では参加制限数を下回った。しかし参加枠がもっと多かったら、いくつかの競技でアメリカの優勢の度合いはさらに大きかっただろう。

1920年、1924年、1928年には、アメリカチームは海と汽車による長い旅をしなければならず、選手は試合のためのコンディションを維持するのが難しかった。

しかし今回は、このハンディキャップはヨーロッパの側にあった。四日から五日の船旅、そして同じような汽車の旅であった。対照的に、アメリカの選手は長いトレーニングキャンプで完全な備えをすることができた。これが当然のことながら結果に反映している。オリンピック大会の競技レベルはかつてない程高く、非常に沢山の世界記録が生まれた。1932年のロサンゼルス大会は、高い水準のスポーツの時代の到来を告げた。

IOCが、すべてをアマチュア規則に則って行ったとはいえないアメリカ人の準備のやり方に異議を唱えなかったことは多少の驚きである。一方では、アマチュア原則に照らして、IAAFはヌルミを生涯出場停止にし、サッカーは大会から除外されていたのである。

因みに、IOCとFIFAがアマチュアの定義で合意できなかったことは、FIFA自身にとっても、ロサンゼルス組織委員会にとっても、まったく歓迎できないというわけのものでもなかった。カリフォルニアでは誰もサッカーに興味を持っていなかったし、ホッケーのように三つか四つのチームしか参加しないよりは、全く試合の無いほうがよかった。

チームスポーツと同じように、馬術や漕艇のように費用のかかる競技は、ヨーロッパの国々が莫大なお金のかかるロサンゼルスへの長旅に消極的であったために影響をこうむった。アムステルダム大会に比べれば半分以下、その次のベルリン大会に比べると三分の一の男女合計1400人程の選手がメダルを争った。

IOCセッションも良い例を残したとはいえない。66人のメンバーのうち参加はわずか18人、そのうちアメリカ人が3人、がロサンゼルスにやって来たにすぎなかった。

しかし素晴らしい組織、熱狂的な観衆、第一級の施設、競技の高い水準が多くの問題を忘れさせたし、次の評価は間違いなくヨーロッパからの参加者の間に共通のものであった。「我々が、ロサンゼルス大会がその壮麗さでこれまでの大会すべてを凌いだといっても、以前の大会を傷つけることにはならないだろう。」

観衆の高い関心はまた、ガーランドとその組織委員会の財政運営をある程度助けたし、公の補助金への依存を大幅に少なくすることを可能にした。

これは、経済危機がアメリカを襲い、大会直前にこのような時にオリンピック大会を開くことに批判のあったことを考えれば、非常に意味のあることであった。

1946年のローザンヌIOCセッションで、ガーランドはオリンピックムーブメントへの貢献と、とりわけロサンゼルス大会の組織運営に対して、1942年度のオリンピックカップを逆上って授与された。

2.6.4. ベルリン 1936年

2.6.4.1. 開催都市指定

大会の九年前にロサンゼルスで開催が決まるやいなや、沢山の都市が1924年のパリ大会の際に開かれたIOCセッションで1936年大会の開催都市を目指して名乗りを上げた。

それらの中に、ブダペスト、ブエノスアイレス、ローザンヌ、ローマなどがあった。

IOCはパリでも、三年後のモンテカルロでも、また1930年のベルリンでも決定をしなかった。しかし1931年のバルセロナセッションまでには真剣な立候補都市は四つに減っていた。そして万年候補のブダペストとローマはいずれまた立候補したいという意向を明らかにしていたので、最後の選択はバルセロナとベルリンの間で行われることになった。

決定をわずかな出席委員(67人中20人)にだけ任さないために、欠席委員に郵便による投票を認めることになった。期限は5月15日までとなった。郵便投票と出席委員の封印された投票の合計は圧倒的にベルリン(43対16)であった。

その前年にベルリンで行われたIOCセッションとオリンピック kongress が与えた好ましい印象がこの投票に影響を与えたことは疑いない。

投票結果が発表されると、ベルリンでは直ちに第XI回オリンピックアードの大会準備が始まった。世界経済恐慌直後の公的資金の頼りにならない状況と高い失業率に鑑み、大会の経費は主として競技連盟が負担しなければならなくなった。競技連盟はこのために基金調達努力を強化し、競技会には特別入場税を課した。

第一回の経過報告は、1933年1月24日の組織委員会結成前にロサンゼルスセッションでレヴァルトによって行われた。彼は組織委員会の会長になり、カール・ディームが事務総長になった。

1933年6月ウィーンで、カール・ディームはより詳細な報告をIOCに対して行うことができた。

2.6.4.2. 大会に対するNSDAP(国家社会主義ドイツ労働党)の矛盾した態度

しかしそのような細かいことのほかに、ウィーンではもっと重要な問題が提起された。それはその間に起こった政変のベルリン大会への影響の可能性、そしてIOCが予定通り行事を続けられるかどうかという問題である。

スポーツがNSDAPのイデオロギーのなかで、軍事教練と強く美しい「北方人種」の理想との関係で重要な役割を演じていたのは事実であるが、オリンピズムとオリンピック大会は「人種を問題にしない」点で忌避されていた。

初期の段階から、党はドイツ体操協会「ドイッチェツルナーシャフト」の反動的なサークルと緊密な関係を持っていた。協会は最後の1932年大会を含むオリンピックをイデオロギー上の理由と「民族的」な理由でボイコットしていた。

しかし1928年アムステルダム大会のドイツチームの成功で、有権者の投票の方により関心のある現実的な傾向のNSDAPの政治家は密かに心変わりを始めていた。

彼らはロサンゼルスでのドイツチームの不振を批判し、ドイツの三倍のメダルをとったファシストイタリーを模範として賞賛した。

ナチスの新聞がレヴァルトとディームをドイツの大会招致の煽動者として激しく攻撃したとき、彼ら

は全力で自らを守らなければならなかったが、この衝突は勿論、IOCの注意を引かずにはおかなかった。

一方バイエ-ラツールは、まだロサンゼルスにいる間に、ナチスに親しいことを知っていたドイツのIOC委員、カール・リッター・フォン・ハルトに、ドイツでオリンピックを開催することについてのヒトラーの意向を打診してくれるように頼んだ。

他の二人のドイツ人委員はこうした使命には全く不向きであった。レヴァルトはドイツ民族党(ドイッチェフォルクスパルタイ)に属し、一度国務大臣を勤めたことがあった。アドルフ・フリードリヒ・ツウ・メクレンブルク公爵は貴族で生涯ナチスを軽蔑していた。フォン・ハルトは1932年9月14日、ヒトラーの官房庁に会見を申し込んだ。9月24日付けの回答は、ヒトラーの選挙キャンペーンのために会見は断ってきたが以下の情報を伝えてきた。

「NSDAPはオリンピック大会のような国際競技会開催に反対しない。またこれらの大会に有色人種が参加することに反対しない。」

フォン・ハルトはこの手紙の写しを10月26日、IOC事務局長アルベール・ベルデーズに送り、バイエ-ラツールにこのホットとするニュースを伝えるよう頼んだ。

1933年3月5日のドイツ国会選挙のまさに次の日、レヴァルトはヒトラーに会見を申し込んだ。驚いたことに、早くも3月16日に会見が受け入れられた。

レヴァルトは組織委員会のプランを示し、帝国大統領のヒンデンブルクが2月早々に大会の後援に同意を与えていたことに言及した。レヴァルトは「総統」の支持の確約を得た。同じ日の日付の官房庁宛の手紙で彼は政府に対する要望を記した。レヴァルトはとりわけ、最近設置されたヨーゼフ・ゲッペルスの宣伝省の助力を要請した。

この手紙に対する官房庁の回答はほとんど全ての点でイエスであった。ヒトラーとゲッペルスは1936年のオリンピック大会が政権の国内外のイメージアップに貢献する巨大な可能性を明らかに理解していた。

煽動的なナチスの新聞、「アングリッフ、攻撃」と「フェルキッシャー・ベオバハター、民族の観察者」はレヴァルトとディームに対する攻撃を強めた。とくにレヴァルトの父方がユダヤ人であることが、彼らに安直な武器を提供した。彼らは二人の辞任を求めた。

レヴァルトは官房庁に抗議し、ヒトラーの命によって彼に対する新聞の攻撃を禁止させることに成功した。

2.6.4.3. レヴァルトの組織委員会会長職維持のための戦い

フォン・チャンマーは、レヴァルトとディームに対する最初の勝利に続いて、組織委員会会長の座をレヴァルトから奪おうとして、新聞のインタビューであからさまにそう言った。レヴァルトにはIOCに介入を求めるほか選択の余地はなかった。

彼はバイエ-ラツールに接触した。バイエ-ラツールは直ちにに応じて、三人のドイツ人IOC委員に5月3日手紙を送り、IOC憲章について「啓蒙」した。

次第に声高になってくるオリンピック大会に対する反対と、その結果国際競技連盟の間にひろまった不安に触れたあと、彼はドイツの指導的なスポーツ指導者の辞任に懸念を表明し、とりわけ、

「オリンピック大会の組織を自分の権限の範囲に属する」として乗っ取ろうとする新しいスポーツコミッサー(大臣)の意図を批判した。これは「我々のルールとオリンピック大会の組織的構造を完全に無視する」ことを意味する。

バイエ-ラツールはドイツのIOC委員に、オリンピック憲章に含まれている儀典と組織の詳細についてヒトラーに通知するよう要求した。つまり「大会は国ではなく都市に開催権を与えられるのであり... 大会には政治的、人種的、民族的、宗教的性格はなく...

組織委員会はIOC直属であり... もしこれらの条件が首相の同意を得られなければ、ベルリンの立候補を取り下げてもらうのが望ましい。」

さらに彼は、ドイツ政府が1933年6月始めのIOCセッションで「オリンピックルールの厳密な遵守を妨げないという書面による保証」を提出するよう要求した。彼はこれらの条件のすべてを5月10日の第二の手紙で繰り返した。

三人の反応は、それぞれの新政権との関係を反映していた。

フォン・ハルトは5月16日のIOC会長への手紙で会長の懸念に関する困惑を表明した。

彼はドイツで起きている「民族革命」を称賛した。そしてドイツ政府の書面による宣言は必要ないとした。彼の見解では「ドイツ政府もスポーツコミッサーもオリンピックの儀典のルールを変えたり、他の解釈をしたりする意図は毛頭ない。」のであった。

バイエ-ラツールの返事は当然のことながら簡単明瞭なものであった。彼は政府の保証を要求し、「ドイツの大会」を黙認することを拒否した。

メクレンブルク公爵は5月13日、IOC会長に対し、この件についてフォン・チャンマー・ウント・オステンに話したと返事した。その会話の中で彼も「IOCの規則と基本的な考え方を説明したが、それは一部、現在のドイツの指導者の態度と鋭く対立するものである。」と書いた。しかしメクレンブルク公爵は、レヴァルトの忠告を基に「IOCの主権と何とか衝突しない」妥協の道が見つかるだろうと考えた。しかしそれにはスポーツコミッサーの立場もまた考慮に入れなければならない。

バイエ-ラツールは公爵への返事の中で、再びドイツの拘束力ある宣言を要求し、大会をドイツ以外へ移す可能性と、それが憲章上まだ可能なことを仄めかした。

つまり、バイエ-ラツールの見解によれば、大事なことは大会の開催を本当に確保することであって、何処で開くかは二の次の問題であった。

レヴァルトは、ヒトラーがIOC会長の「傲慢な調子」に怒って彼との会見を拒否し、大会名誉会長職の申し出を断った時、この会長の脅しを楯にした。

5月15日の返事にレヴァルトは書いている。「残念なことに」「バイエ-ラツール伯爵の手紙の調子は彼にも不穏当に見える」し、最初は手紙を渡すのをためらったけれども、最終的には、彼もIOC規則と多くの国が「大会のドイツからの引き上げ」に賛成していることをドイツ政府に隠しておくべきではない、という結論に達した。

レヴァルトは、組織委員会の副委員長、ベルリン市長ハインリッヒ・ザームを伴って、前もって国務長官ハンス・プフントナーと会見するために、内務省を訪れた。その訪問でレヴァルトは自分が、ウィーンでバイエ-ラツールに彼の手紙に対する激しい言葉の拒否を伝えるよう期待されていることを知った。その言葉はスポーツコミッサー自身によるものであった。レヴァルトは何としてもこうしたやり取りが起きるのを避けねばならなかった。この種の回答はベルリンでの大会を不可能にすることは確実だからである。しかしおそらく彼はそれほどはっきりとは伝えなかったのだろう。

いずれにせよ、彼は組織委員会会長にとどまることを許された。一方政府はドイツオリンピック委員会会長と組織委員会理事にフォン・チャンマー・ウント・オステンを置くことで満足した。これが多分、ツー・メクレンブルクが彼の手紙の中で触れている「レヴァルトの妥協的提案」であったのだろう。この提案については、エドストレームが4月21日に既にIOC会長にやや漠然とした言葉で伝えていた。

エドストレームはロンドンへの商用の帰途、ベルリンへの回り道をしてレヴァルトを訪ねていたのだ。このときレヴァルトは不在であったので、エドストレームは代わりにディームと話した。ディームから聞いたところでは、レヴァルトは組織委員会会長には留まるが、NOC会長は新政権の代表に譲らなければならないだろう、この妥協によってレヴァルトとディームが生き残れるということであった。

エドストレームはまた、参考として、バイエラツールのドイツの委員に宛てた手紙の写しを受け取った。そして彼は5月8日の返事の中で会長に対する支持を表明した。「私は貴方がこの決然たるステップを取られたことを嬉しく思います。今やヒトラー氏は本当にオリンピック大会を望むのかどうか決心することができるでしょう。」

2.6.4.4. ユダヤ人選手の参加問題

バイエラツールはドイツのIOC委員に要求した保証を更に明確化した。彼のドイツの同僚に宛てた最初の手紙は、「人種」差別の禁止について言及しただけであったが、5月16日には、反ユダヤ感情を持っていないことを知っている19人のIOC委員に宛てて、ウィーンではユダヤ人選手の参加の権利に関する宣言を受け取ることを期待しているという趣旨の手紙を書いた。

この件に関して、数日後、ナチスの内務大臣、ヴィルヘルム・フリックとスポーツコミッサー、フォン・チャンマー・ウント・オステンとの間に議論が行われた。

5月31日、フリックは自分の次官に対し、「原則として、ドイツのユダヤ人は大会でドイツチームから排除されることはない。」と通告した。

これが1933年6月にECがウィーンで会合し、その後にセッションがもたれた時の状況であった。

ECにとってもセッションにとってもこの問題に取り組むのははじめてであった。ドイツ代表団には三人のIOC委員のほか、組織委員会のディーム事務総長とスポーツコミッサー代理としてアルノ・ブライトマイヤーが含まれていた。

ディームがベルリンの準備状況について中間報告をしたとき以外は、委員でない二人は勿論会議に参加することは許されなかった。しかし二人は式典には参加できたし、会話に加わることもできた。

議事録によれば、執行委員会は6月5日に「1936年のベルリンにおける第十一回オリンピック大会の問題」について最初の論議をした。しかし議事録には議論の詳細は記載されていない。おそらくレヴァルトとの会話に基づいて書いたと思われるディームの6月5日の日記がおおよその内容を伝えてくれる。

「レヴァルトがフリックの手紙を執行委員会の会議で読み上げるようにしたので、36年大会は我々にとって確実なものになったように思われる。ドイツの組織の承認には何の問題もなかった。焦点はユダヤ人問題であった。フリックの手紙は原則としてユダヤ人を除外することはないと宣言していた。IOCはそれを信用した。この手紙の写しはファイルされ、その立場は勿論公にされ

た。これを秘密にしておくことなど考えられなかった。ユダヤ人の除外は大会の中止を意味した
だろうからである。アメリカ代表(シェリル)は沢山の手紙と電報を示した。即ちドイツの誓約がな
ければドイツはオリンピック委員会に留められないということであった。」

二日後、この問題はバイエ-ラツール再選の直後のセッションの最初の会議で扱われた。バイエ-
ラツール会長は状況を簡単に説明し、ドイツ人委員は「担当大臣」に全ての段階で情報を伝えて
きており、今日以下の宣言をすることになっていると言った。

「国際オリンピック委員会会長はドイツ代表に対し、彼らが組織委員会と参加資格規則に関する
憲章の遵守を保証することができるかどうかを質問している。

三人の委員を代表してH.E.レヴァルト博士は政府の同意を得て以下のように回答した。1)ドイツ
オリンピック委員会は委託された権限を以下のメンバーからなる特別組織委員会に付託した。

H.E.レヴァルト博士、会長、
アドルフ・フリードリヒ・メクレンブルク-シュヴェーリン公爵、
リッター・フォン・ハルト博士、
フォン・チャンマー氏、ドイツオリンピック委員会会長、
ザームベルリン市長、(国会議員?)
ディーム氏、事務総長

2)全てのオリンピック規則は守られる。

3)ドイツのユダヤ人は、原則として、第十一回オリンピアードの大会のドイツチームから排除される
ことはない。

残念なことに、ディームの日記の記述から発見が期待されたフリックの手紙の写しが、EC会議の
ファイルの中になので、このIOCでの宣言が、大会のベルリン開催を確保するためにナチスの
内務大臣が自ら書いた手紙ですすでに述べた譲歩をさらに上げたものかどうかを正確にいうことは
できない。

この問題の基本的な状況についての証拠は、IOC資料館に残るレヴァルトの上記宣言に関する
草稿と、アメリカ人、シェリルが6月12日バリからアメリカのラビ、ワイズに宛てて書いた手紙に見るこ
とができる。シェリルは手紙の中でドイツ人のさらなる譲歩を自分の功績に帰している。

これに照らしてみれば、ウィーンでのものごとの展開がおおよそ次の様なものであったと想像され
る。すなわち、ECの会議はフリックの手紙を受理したが、委員は十分に満足すべきものとは思わな
かった。とくにシェリルは明らかにさらに正確な文言を求めた。これはドイツのユダヤ人に対する特
別な同情のためではなかった。それどころかシェリルは反ユダヤ主義者で、ヒトラーの賛美者であ
った。しかし彼はアメリカ合衆国で高まりつつある抗議運動の風向きを考慮に入れねばならなかつ
た。

そのうえ、レヴァルトはウィーンのドイツ大使館を通じてベルリン政府の同意を取り付けて宣言を
書いた。これがセッションを満足させたのである。

しかし、本質的な改善はほとんどされなかった。というのは、ディームの開催準備の経過報告はド
イツの保証についての議論に先立って行われたが、6月7日の日記に次のように記している。なお
この議論に彼は加わることを許されなかった。

「政治問題は前もって決着していた。委員はドイツが必要な保証をしたというバイエラツールの言葉を聞いたが、正確な文言を求めた。すなわち原則として、ユダヤ人が排除されない、という言葉である。アメリカ人、シェリルは次のように言った、自分はオリンピック大会でドイツが、絶対に、自国のユダヤ人を他の国からやってくるユダヤ人より悪い扱いをしないように望む。」

ベルリンはこうして大会開催の権利を確保したし、憲章に従って、レヴァルトはIOCに対しガルミシュ・パルテンキルヘンが冬季大会を開催することを発表することができた。

論文ではしばしば、IOC、場合によってはバイエラツールが、ナチスに対して弱腰であった、慙懃であったと判断されてきた。しかしIOC会長も、ほとんどの彼の同僚も、1933年6月の時点で、ヒトラーとその党の大臣や国務長官らが協定や契約に従うつもりがないことを知るはずがなかった。

IOCがドイツから大会開催権を取り上げなかったのは、ドイツがオリンピックムーブメントに復帰して以来十年近く、共に働き信頼関係を築いていたレヴァルトとその周辺を信頼したからであるのは疑いのないところである。

党の支配するドイツの新聞、「フェルキッシャー・ベオバハター」がウィーンでの決定に関して「新しいドイツにとっての成功」と書いたのは、せいぜいのところ半分しか真実ではなかった。何故なら、当時、IOCもまた、オリンピックの原則に固執することによって、ナチス政権から望ましい譲歩を何とか勝ち取ったと成功をうたうことができたからである。

2.6.4.5. 増大するナチスの影響力

1933年7月5日、ベルリン組織委員会は委員会自体に対して新しい規則を施行した。理事会と委員会は拡張されて、多くの政府代表と軍代表を含むようになった。

これ自体は異常なことではなかった。1894年のオリンピック委員会設立の kongress の決議のなかでもハッキリと呼びかけられていたが、オリンピック大会の実施は(1896年以来) 国の援助なしには不可能であった。

問題は、新しいメンバーの大部分が熱心なナチス信奉者であり、彼らのイデオロギーがオリンピックの理念から遠く離れたもので、彼らの組織委員会での仕事に影響を及ぼした点である。IOCが信頼する代表は今や「閉じ込められ」、独立を守るのに汲々とせねばならなかった。彼らの困難は、大会が政府の援助を受けただけでなく、経済的に公債に大きく依存していたために一層深まった。

ヒトラーの指示によって、1933年秋から、当時世界最大のスポーツ施設建設と、組織と執行の両面で前例のない完璧さを可能にするに十分な財源が得られるようになった。

1933年8月、スイスのシャフハウゼンで組織委員会事務総長ディームとクーベルタンとの会合が行われた。クーベルタンとディームは「芸術の総作品」としてのオリンピック大会という理想を分かち合い、文化的デザインについて話し合った。

ディームと組織委員会、そして宣伝目的のために政府は、クーベルタンが大会に参加するよう懸命に説得した。しかし幾分躊躇ったあと、クーベルタンは参加を断った。

彼自身の参加は、1935年8月4日のラジオのシリーズ番組の開始挨拶と、オリンピアでの聖火リレー出発にあたっての挨拶のメッセージ、そしてオリンピック開会式で放送されるベルリン市へのメッセージに限られた。

2.6.4.6. ユダヤ人問題とボイコットの脅威

この間、1933年後半、ドイツスポーツの「再編成」が続いていた。

「指導者原則」(フューラープリンチップ)がスポーツ連盟とクラブに導入され、フォン・チャンマー・ウント・オステンが帝国スポーツ指導者(ライヒスシュポルトフューラー)に任命され、ユダヤ人(非アーリア人)は全てのスポーツ組織から追放された。

これは外国に知れずにすまなかった。そして数多くの抗議とベルリン大会ボイコットの呼びかけが起こった。これはとくにアメリカで強かった。

この傾向に対抗するため、レヴァルト、ディーム、フォン・チャンマー・ウント・オстенはオリンピックの五つの輪を描いた特別機に乗って宣伝の旅を何回も行った。この旅の際、彼らは多くのIOC委員と各国オリンピック委員会を訪ね、贈り物をした。

バイエラツールは事態の推移を心配し、1933年10月29日、レヴァルトに説明を求めた。レヴァルトはフォン・チャンマー・ウント・オстенと内務省の國務長官、プフントナーに相談し、11月23日、IOC会長に以下の回答を寄せた。

「ドイツ政府もドイツオリンピック委員会も総統に任命されたドイツスポーツの指導者であるフォン・チャンマーも、オリンピック大会へのユダヤ人選手の参加に反対したり、ユダヤ人選手を体操クラブやスポーツクラブから追放するような命令を出したことはない。体操クラブやスポーツクラブが独立の団体として、それぞれの判断でユダヤ人の加入を拒否している限り、何人も認めるように如何ともしがたい。

アメリカ合衆国自体にもユダヤ人メンバーを認めないクラブが何百となくあることは天下周知の事実である。」

何がレヴァルトに、父がユダヤ人であり、彼自身ナチズムの全体主義的目的の犠牲になって組織委員会会長の職を失ったレヴァルトに、このような主張をさせたのかを想像するのは難しい。彼はすべてのスポーツクラブがユダヤ人メンバーを追放しているのを知らなかったのだろうか？ すべてのスポーツクラブが法的には独立であっても、ユダヤ人の会員を認めたら直ちに禁止あるいは解散させられることが、彼にはハッキリ分かっていなかったのだろうか？ 一体、ユダヤ人選手は何処で、何時、オリンピック大会に参加する準備をできると言うのだろうか？

同じように事態を憂えて問い合わせてきたイギリスのIOC委員、クラレンス・アバデア卿に対して、レヴァルトは、ドイツには他の多くの国と同じようにユダヤ人のトップアスリートは数少なく、オリンピックに参加したのも少ないとして、問題を相対化しようとした。続いて1934年5月にアテネで行われたIOCセッションで、ガーランドと共にユダヤ人の扱いによって起こったボイコットの脅しを議題に入れさせたのはアバデア卿であった。

バイエラツールは、自分はこの問題について、ドイツの委員と断えず手紙で連絡していたと報告した。フォン・ハルトは「ウィーンでの約束は忠実に守られてきた」と述べた。「非アーリア人」にオリンピックに対して準備する可能性はあり、ユダヤ人の組織は適当な選手を推薦するよう求められていた。

これらの指示は本当であった。いくつかのクラブは努力して、ユダヤ人選手を英才コースに招い

た。しかし、オリンピックに出るようなトップレベルの選手はこの方法では発見されなかった。そこでフォン・ハルトは「1936年の大会に参加するよう招待されていた有力ユダヤ人選手」の一群の名前をあげた。この中に有名なヘレーネ・マイヤーとルディー・バルがいた。しかし二人とも血筋からいって半分ユダヤ人で、母親はユダヤ人ではなかった。またユダヤ教徒でもなかった。

1935年9月15日のニュールンベルグ法の後でも、二人はドイツ市民権とそれに付随した権利を保持していた。そしてバルは1936年大会の後でさえナショナルチームでプレーを続けた。この件にはIOCの目をくらす企みがあったという印象を拭いがたい。とくに「非アーリア人」という言葉の繰り返し繰り返しの使用がその印象を強める。フォン・ハルトに続いて、レヴァルトも同じ言い方をした。

彼らは明らかにバイエ-ラツールに対してはうまくやっていた。バイエ-ラツールはこの件に付いての一番の懸念を再び強調したときに、ユダヤ人という言葉と非アーリア人という言葉を区別せずに使った。

「オリンピック大会には道徳的欠陥があってはならない。そして大会は、反ユダヤのためにせよ、ユダヤ人支持のためにせよ、主催者のためであれ、その他の誰のためであれ、一切の政治宣伝に使われてはならない。ドイツの非アーリア人がトレーニングし、試合し、参加できるという約束はここにハッキリと厳粛に繰り返されている。」

IOC会長の要求に対し、レヴァルトとフォン・ハルトは再び以下の声明を含む宣言を書面で提出した。

1. 必要な能力があるかぎり、非アーリア人のスポーツマンをドイツオリンピックチームに入れるという、1933年にドイツがウィーンで行った誓いは厳格に守られ、準備のための設備はすべてのスポーツマンに与えられる。」

しかし議論は、公開され公の目的のために使用された二つの議事録が示すよりもはるかに厳しく、込み入ったものであったに違いない。

その夜、ディームは自分の日記に次のように書いた。「IOC委員は明らかにドイツ大会開催を欲した。そしてレヴァルトの絶大な人気が決定的な要因であった。我々は大会を彼一人に負っている。もし彼がいなければ、我々はオリンピックを失っただろう。」

2.6.4.7. 聖火リレー

勿論、アテネのセッションでは来るべき大会の準備についても議論された。とくに1928年大会で開会式に導入されたオリンピック聖火を、オリンピアからベルリンまでトーチリレーすべきだというディームの提案が論議された。

トーチリレーのアイデアは1931年に生まれていた。トーチリレーは古代と現代を結び付け、国々をオリンピック共同体の中に統一する絆を反映するオリンピズムのシンボルとなるべきものであった。クーベルタンとバイエ-ラツールの二人が計画に賛意を表明したのち、1934年5月18日、聖火リレーはアテネのIOC総会に提案され、その日のうちに承認された。そのあと数日間、IOCは、とくにペロポネソスで創立の40周年を祝うことになっていたためギリシャに留まったが、聖火リレーの計画は熱い議論の対象であり続けた。

ギリシャオリンピック委員会の中に、このアイデアに対する情熱をかき立てるのは難しいことではなかった。そしてディームとギリシャオリンピック委員会の事務総長ジャン・ケティアスはこの計画のために手を携えて働いた。

アテネではまた、ベルリンの勝者をメダルと共に月桂樹の冠で表彰する実験の許可が与えられた。

2.6.4.8. むし返し:ドイツのユダヤ人とオリンピック大会

アテネでの保証を実践することを文書で証明するために、フォン・チャンマー・ウント・オステンは7月18日、「ユダヤ人その他の非アリア人のスポーツ実践についてのガイドライン」を出した。

再び数人のユダヤ人が準備コースに参加したが予選を通らなかった。

表向きは、クラブが非アリア人の加入を認めるかどうかはクラブが自由に決められることになっていた。そしてユダヤ人のスポーツ協会に練習グラウンドを使用させるかどうかは、他のクラブが申し込んでいない限り、自治体が決められることになっていた。

これらのすべての融和策と厳粛な宣言は、ユダヤ人、従ってユダヤ人選手に対して現実に開かれている可能性と際立った対照をなしていた。この可能性は日々より厳しく狭められていった。そのため外国での抗議は一層の高まりを見せていた。

今や、他の国に大会を移すには遅すぎた。そしてドイツのIOC委員と政府機関によって与えられた保証があることは、オリンピック憲章のなかに大会をキャンセルする十分な根拠がないことを意味した。

IOCはアメリカやイギリスやその他の国の批判やボイコットの呼びかけに対して、ドイツの「保証」を弁護しなければならないという不愉快な立場に立たされた。

純粋な、非政治的なスポーツが存在するという幻想にしがみついているかぎり、バイエラツールとその同僚一同にレヴァルト、ツー・メクレンブルク、そしてディームーは、多かれ少なかれナチスの思いのままにならざるを得なかった。ナチスは厚顔に、冷酷にスポーツを悪用し、オリンピック大会を彼らの政治目的のために利用した。

形式上の状況は如何に正常であったとはいえ、大会の一年前、ベルリンでのオリンピック大会をほとんどお終いにしかねない事態が起こった。

IOC委員のチャールズ・シェリルは、確信的な反共主義者、反ユダヤ主義者でムツリーニとヒトラーの賛美者であったが、大会ボイコットに反対する彼のキャンペーンを支持するドイツの明確な保証を強く求めていた。彼はヨーロッパへの旅の途中、1935年8月24日、ヒトラーに接見された。その時、彼は独裁者にウィーン宣言を更新するよう求めた。

ヒトラーはその内容を知らなかったといい、そのような宣言はゲストとしてやって来るチームのユダヤ人にも適用されるので、ドイツのユダヤ人に適用されるのではないと言い張った。シェリルが大会取消の危険を仄めかすと、ヒトラーは自身の立場を固守し、その場合はドイツのオリンピック大会になるだけのことだと言った。

しかしヒトラーはウィーン声明のテキストを調べさせることに同意した。

1935年8月30日、シェリルはガルミッシュパルテンキルヘンからバイエラツールに報告し、ヒトラーとの会話を知らせてバイエラツール自身が個人的に彼に会うよう求めた。

「ご自身で総統にお話しになるようお願いいたします。そして総統に、1933年6月の内務省の手紙、1936年のドイツチームからのドイツのユダヤ人排除に関して、貴方がウィーンでベルリンから受け取った手紙を見せて下さい。貴方は貴方の生涯で最も大きなショックを受けることになるのは必定です。」

この間、ヒトラーはウィーン宣言の正確な意味を教えられ、そしてそれを根拠にドイツは「ドイツ市民権を持つユダヤ人選手をオリンピックの水準に引き上げる義務はないのだ」と告げられた。結局、「誰がドイツチームに入れるか」を決めるのは帝国スポーツ指導者であった。この基準によって、ただ一人水準に達していたユダヤ人選手、走り高跳びのグレーテル・ベルグマンは、後にドイツチームに参加するチャンスを奪われねばならなかった。こうした官僚的形式主義にも決して不案内ではなかったヒトラーは、ニュールンベルクの国家社会主義ドイツ労働党(ナチス党)党大会(9月8日から14日)に外交官特権をもつゲストとして招かれていたシェリルに、ドイツはオリンピックのルールを守るという言葉を伝えた。そこでアメリカに帰ったシェリルは、アメリカの大会参加キャンペーンを続けた。

大会に反対するキャンペーンは、とりわけアメリカで勢いを増していた。とくに1935年9月15日、党大会直後、いわゆるニュールンベルク法が施行されてから激しくなっていた。この法律の下では、ユダヤ人はドイツ市民権を与えられず、ドイツ人とユダヤ人の結婚は禁じられ、懲役刑が科せられた。

1935年10月末、IOC会長はヒトラーに会見を求めた。ヒトラーは11月5日に接見した。

ヒトラーとそのスタッフは前もって、彼らが会う人物について入念なブリーフィングを受けていた。

彼らはバイエラツールが何度もドイツでユダヤ人がトレーニングのチャンスを与えられていると保証してアメリカ人の同僚を宥めようと試みたことを知っていた。

そしてバイエラツールが、必要とあらば、1936年の大会をボイコットするのが如何に馬鹿げたことかをアメリカの大衆に説得するために、自らアメリカに旅することを厭わないことを知っていた。

レヴァルト、フォン・チャンマー・ウント・オステン、ディームそしてフリックが同席したバイエラツールとヒトラーの会話の記録は残っていない。

しかしバイエラツールが11月17日にアメリカのIOC委員に書いた手紙から、彼がユダヤ人選手が適切な方法でトレーニングできる保証を再び与えられたという結論を出して間違いないだろう。

「すべて我々の要求どおりになった。つまりヘレーネ・マイヤーとバル兄弟はドイツチームに参加するよう求められている。他のユダヤ人選手もプレオリンピックトーナメントに参加した。アメリカオリンピック協会の小冊子に報告されていることはすべて正しい。」「ヒトラーはさらにそれ以上のことをした。私の要求で、長い論議のあとこの国を訪れる外国人にとって不愉快なポスターをすべて、ベルリンとミュンヘンとガルミッシュから撤去するとヒトラーは約束した。」

IOC会長がここに述べているポスターの件は、大局から見ればあまり重要ではないだろうが、それでもこれはドイツで組織的にかき立てられていた反ユダヤ感情が主としてどういう角度から見られていたかに光を当てるものであるし、オリンピックの調和を乱す源となりかねないのがナチのフォン・ハルトだけでないことを明らかにする、よすがとはなる。

1935年4月、ガルミッシュパルテンキルヘンを訪れたディームは、多くの場所の入口に「ユダヤ人

お断り」の言葉が書かれた掲示を見た。彼はフォン・ハルトにこうした敵意を露にしたものを取り去るよう手紙を書いた。

フォン・ハルトは求めに応じたが、国務長官、プフントナー宛の1935年5月14日の手紙に、彼の気持ちが無処にあるかをハッキリ明かしている。

「国務長官殿、私がユダヤ人を助けるために心配しているのではないことを確認してください。私の懸念はオリンピックの理念とオリンピック大会にだけ向けられています。何年ものあいだ私はボランティアとして私のすべての時間をそのために捧げてきました。もしオリンピック大会が上に述べたような理由によってドイツで行われなくなったりしたら、私にとって生涯最大の失望となるでしょう。」

5月28日のレヴァルト宛ての手紙の中で、彼はさらに計算された言葉で自分を表現している。

「私は... 国際オリンピック委員会に対して帝国政府がした約束についてこの機会に率直に申し上げたい。私はリーベル高等法院判事が言及している掲示は、もし我々がオリンピックを開催するのであれば、あり得ないことであると述べた。そしてもしこれらの掲示が直ちに取り除かれなければどうなる恐れがあるかについて概略申し述べた。私はこのナンセンスが直ちに終わりにされなければ、ガルミッシュ大会が失敗し、ベルリンオリンピックが取消になると話した。」

2.6.4.9. アメリカをボイコットさせようとして失敗したヤンケの試み

バイエ-ラツールのヒトラーとの会見のあと、フォン・ハルトはアメリカの大会参加を勧めるためにIOC会長のアメリカへの旅の経費を賄うことを示唆した。

しかし当時アメリカオリンピック委員会会長であったアベリー・ブランデーは、シェリルやガーランドと共にアメリカの参加を支持していたが、この提案はかえって逆効果になる恐れがあるとして断った。

三番目のアメリカIOC委員アーネスト・ヤンケだけがそれまでベルリン参加についての意見を表明していなかった。そして1935年11月に、バイエ-ラツールとレヴァルトからボイコット反対キャンペーンに支持を求められた時、彼は公開書簡で回答したが、その中で自分は良心に従って、アメリカが大会参加を犠牲にすることを呼びかけている人達と連帯すると述べた。しかし親ベルリンググループは遂に勝ちを制し、12月初めのAAU会議でアメリカチームを派遣する決定がなされた。

バイエ-ラツールとレヴァルトは直ちにヤンケを厳しく攻撃した。レヴァルトはヤンケにはオリンピックの理念を根拠に議論する権利はないと主張した。IOC会長はヤンケにIOC委員をやめるようにとまでいった。

ヤンケは1936年2月7日再びバイエ-ラツールへの手紙で自分の立場を弁明し、辞任を拒否した。その結果、ガルミッシュパルテンキルヘンのIOCセッションでは、出席者が少なかったため追放の投票は行われなかったが、ヤンケとの往復書簡のコピーを全メンバーに配付することを決めた。ベルリンのセッションの時までにヤンケは辞任しなかったため、彼はそこで全会一致で追放された。この投票で、ガーランドはヤンケの行動に賛成していなかったが棄権した。アベリー・ブランデーはヤンケの後任としてIOC委員に選ばれた。

2.6.4.10. ナチスの宣伝の道具に使われたオリンピック

バイエ-ラツールのヒトラー訪問とアメリカの大会参加決定のあと、抗議の波は退潮し、ドイツの準備状況と参加国が主な関心の的となった。

1936年2月6日のガルミッシュパルテンキルヘン冬季オリンピック大会開会の直前、さらにもう一度、IOC会長と総統との短い会見があった。この会見にはフォン・ハルトも地元組織委員会会長として同席した。

バイエ-ラツールはヒトラーに、今やIOCが大会の全責任を負うこと、大会がいかなる政治宣伝もなしに行われるべきこと、国家元首は開会に当たって規定の文言だけを宣言すべきことをひるむことなくハッキリと告げた。伯爵は開会式の式次第を紙に書いてヒトラーに手渡した。ヒトラーは皮肉っぽく次のように答えたと伝えられている。

「私はこの文言を暗唱できるよう全力を尽くします。」

冬季大会そのものは組織の面でも、競技の成績の面でも、そして一般大衆の参加という面でも成功であった。

国際的に激しく非難されたドイツのロカルノ条約破棄やそれに続くドイツ軍のラインラント非武装地帯進駐にもかかわらず、ベルリン大会は今や支障なく開催されていたが、その間、ナチス政権は、形式的には規則に反することなく、再三再四大大会を自分たちの宣伝に使うことに成功した。

1936年7月29日の第36回セッション開会に当たって、バイエ-ラツールとレヴァルトだけでなく、ヒトラーの代理、ルドルフ・ヘスやフォン・チャンマー・ウント・オステンも演説した。ヒトラーは開会式の夕方、IOCのために催されたレセプションで、更に大きな宣伝効果をあげた。1935年12月11日に、フォン・チャンマー・ウント・オステンはヒトラーに、1936年大会を記念して古代オリンピックの遺跡発掘を完成するための経費を出すことを提案していた。これはディームが1934年と1935年、オリンピアを訪れた際に既に持ち出していたアイデアで、レヴァルトの賛成を得ていた。

ヒトラーは必要な大枚30万ドイツマルクのクレジットを承認し、セッションの開会前のIOC委員を招待した朝食会でこの決定を発表した。

「私は、1936年のベルリンにおける第11回オリンピアド祝賀の永遠の記念として、古代オリンピックの祝祭と競技の施設の発掘をもう一度取り上げ、完成することを決意した。」

オリンピアの発掘作業は1936年8月15日に始まり、大戦の勃発以後も続けられた。

1952年、ディームの75才の誕生日に、ドイツスポーツ連盟はスタジアム発掘完成に必要な金を献金した。1961年、アテネの第59回IOCセッションと第1回国際オリンピックアカデミーが行われた際に、ディーム臨席のもと、オリンピアのスタジアムが厳かにオープンされた。

IOCの方では防ぐことのできない多くの違反はあったが、儀典上のハッキリした違反が起きたときは、バイエ-ラツールは介入する勇気を持っていた。

大会初日、ヒトラーは白人アーリア人種で最も良い成績を上げた三人の選手を自分のボックス席に呼んで個人的な祝福を与えた。IOC会長はフォン・ハルトを通じて、これはオリンピックの規則では許されないことを告げた。ヒトラーは謝罪し、それ以後、ドイツ人メダリストだけを私的に祝福した。

2.6.5. 東京／ヘルシンキ 1940年—開かれなかった大会

2.6.5.1. 開催都市指定と最初の準備

1940年大会の開催都市指名についての最初の痕跡はロサンゼルス大会の際に開かれたセッションの議事録に見られる。しかしそこでは、後に熱心な候補者となるヘルシンキ、東京、ローマのうち一つの都市だけが名前を挙げられている。それはフィンランドの首都、ヘルシンキであった。

その後二年間、この問題は非公式に論じられていたが、1935年、決定をしなければならないオスロのセッションで、IOC委員の杉山丈太郎、アルベルト・ボナコッサ伯爵、エルンスト・クロギウスがそれぞれ、東京、ローマ、ヘルシンキの招致演説をした。しかし、投票はまた延期された。

ベルリンセッションの数週間前、ムツリーニは、二人のIOC委員の訪問を受けて、1940年に紀元2000年を祝う日本の求めに応じてイタリアが招致を断念することに同意していた。そのため日本とフィンランドの首都だけがベルリンで争うことになった。

支持、不支持の議論が再び交わされた。バイエラツールは両方の都市に対する推薦を発表することができたが、日本に対する好意の方がより鮮明であることが明らかになった。東京を押しIOCの最終決定はまた、大変な距離を埋め合わせる日本の寛大な旅費援助の申し出によって影響されたことは明らかである。

それに将来の枢軸国、日本、イタリア、ドイツの間の協力関係は既に露になっていて、それらの国のIOC委員は東京支持のブロックを形成していた。

この結果は勿論、日本で大きな喜びと同意をもって受け止められ、日本のIOC委員は皇室からの御下賜金をもって成功をねぎらわれたほどである。

東京の組織委員会は1936年12月9日に結成され、1937年5月からはヨーロッパやアメリカに準備状況を知らせるため、フランス語、英語、ドイツ語、スペイン語(隔月)のブレットインを発行した。

技術顧問、クリングベルクはIOCに対する最初の報告を1937年6月の第37回セッションで行った。そのなかで、彼は予定される競技名を発表し、選手村の宿泊の援助に選手一人当たり一日1.5ドルの数字をあげ、海上運賃に一人当たり500円の補助を約束した。これは運賃をおよそ1700円に減額するものであった。また大会の正確な日付もワルシャワで論議された。そして8月末から9月はじめのスケジュールが投票で決定された。

2.6.5.2. 日中戦争—オリンピックへの脅威

1937年7月7日、日中紛争は公然たる戦争へと拡大した。日本軍は中国へ侵入し中国領を占領した。アメリカは蒋介石の率いる中国政権を支持し、間もなく日本でのオリンピックに反対する抗議の波が感じられるようになった。

そしてIOCは1938年3月半ばのカイロとナイル河上でのセッションで立場を明確にしなければならなくなった。中国のIOC委員、チェンティン・ワンの、大会を他の場所に移すよう明確に求めた電報が読み上げられたあと、バイエラツールは、現在の状況ではオリンピック憲章によってそのような動きを正当化することはできないという見解を表明した。

多分さらに当たり前といえれば当たり前だが、日本のIOC委員、加納治五郎も日本で大会を開催すべきでないとは一向に思っていなかった。

IOC全体としては、結局のところ、予定された大会の期日迄に敵対行動が終わっていない場合のみ、日本は大会を返上すべしという見解に落ちついた。

それからセッションは当初の議題に戻り、東京での準備状況を議論した。冬季大会については既に二日間論じられていた。東京大会の事務総長、永井松造とクリングベルクは大会の財政の詳細、プログラムと施設の計画を報告した。

聖火リレーについては、スウェーデンの自然科学者でアジアの専門家、スヴェン・ヘディンが計画を作り上げていた。オリンピアから東京への道はディームの助言によって大部分陸上ルートになっていた。これをスウェーデン人の同僚、クラレンス・フォン・ローゼン伯爵が説明し、結論はでなかったが、IOCによって論議された。

また、大会の期日についてさらに議論された。主催者はワルシャワでの決定に不満だったのである。クリングベルクが提出した気象データによれば8月の東京はあまりに暑く、湿度が高い。彼は9月末から10月はじめをより適切な時期として提案した。

IOCが遅い会期(9月21日から10月6日)に投票するとアメリカの委員、ブランデーは猛烈に抗議した。彼の意見は本国で広い支持を得た。新しい会期はアメリカの大学の学期の真ん中に当たったので、大学生であるアメリカの選手は東京大会を取るか勉学を取るかの選択を迫られることになるのである。その結果はおそらくアメリカチームの顕著な弱体化となったであろう。

日本、イタリア、ドイツの委員は遅い会期に投票したので、IOCのなかにファシストブロックができたと言われた。しかしワルシャワに出席していたこれらの国の五人のIOC委員がまとまって投票しなかったとしても、投票の結果は17対8の一方的なものだったので、結果に違いはなかっただろう。

IOCは、とりわけ英語を話す国々で兆し始めた日本でのオリンピックに対するボイコット運動にもかかわらず、一度選んだ会場、東京に固執した。とはいってもIOCは、中国における戦火の拡大を非常に心配していた。

「公式の」セッションが終わったあと、さらに3月18日、秘密の執行委員会がもたれた。ECは日本が大会を放棄した場合必要な決定をする権限を与えられていた。

ヘルシンキとオスロが夏と冬の大会または夏か冬の大会を開催することに同意していた。そしてもしフィンランドの首都にとって準備時間があまりに短いという事態になったら、ロンドンが最後の瞬間に何時でも肩代わりすることになった。

バイエ-ラツールはセッションの終わりに「日本の人達へ」と題するラジオ演説で、状況の深刻さに言及し、大変回りくどい言い方ながら、もし軍事紛争が直ちに終わらないならば、大会を返上するよう責任ある人々に訴えた。

2.6.5.3. フィンランド、大会を肩代わり

1938年7月15日、日本はどうとう大会を返上した。そしてエルンスト・コルギウスがバイエ-ラツール会長に大会をヘルシンキで開催できると通知するや、フィンランドでは熱烈な歓迎の声が起こった。丁度二年前、日本で起きたのと同じような歓迎ぶりであった。新聞は号外をだし、必要経費を保証する基金の応募は直ぐに満額に達した。

8月18日には組織委員会がつくれ、ヨハン・ウィルヘルム・ランゲルが会長に任命された。彼は

郵便投票によって直ちにIOC委員となった。郵便投票はこれが最後になった。V.A.M.カリコスキ中佐が事務総長に選ばれた。執行委員会は9月3日までに、1940年ヘルシンキ大会のプログラムに取り組むことができた。

フィンランド国家とヘルシンキ市は三億フィンランドマルクを提供した。この金で組織委員会は1934年のスタジアムのスタンドの収容人員を6万人に拡大すること、他の必要な競技施設、それにオリンピック選手村の建設ができることになった。

また聖火リレーのルートも検討された。オリンピック聖火はベルリンを経由してヘルシンキに到着するはずであった。プレスサービスは全部で10号まで出たが、準備状況を8か国語で報告した。

クロギウスとカリコスキが1939年6月にセッションで報告を行ったとき、彼らは招待状と詳細なプログラムを提出することができた。IOCは非常な満足を示し、準備期間が短かったことを理由にホッケーを行わないことに同意した。

1940年の冬季大会も国際スキー連盟(FIS)との紛争にもかかわらず、開催可能に思われたので、会場はガルミッシュパルテンキルヘンが適当とされた。IOCは将来に確信を持っていた。会長バイエ-ラツールは1940年大会に関してIOCは政治的影響から自由な決定を下すことができたといい意見であった。

1939年9月4日、ヒトラーのドイツがポーランドを攻撃した3日後、フィンランド組織委員会は会議を開き、事態にかかわらず仕事を続けることを決めた。その後直ぐ、フィンランドも軍事紛争に巻き込まれずにすまないだろうということがハッキリしてきたが、組織委員会は数週間後、大会開催に向けて進む決意を再確認した。

その間、当然のことながら事態についてもっと現実的な見方をしたバイエ-ラツールは、戦争中でも大会を開催すべきか、もしそのような大会が開催されたとして選手は政府から参加を許されるだろうかについて、各国オリンピック委員会と国際競技連盟に回状を回して意見を聞いた

しかしヘルシンキで開催を準備する人達はこの質問への回答によって自分たちの運命が決せられることを望まなかった。ドイツが冬季大会を1939年11月22日に放棄したのに対しても、フィンランド組織委員会は最初、大会開催を諦める動きを見せなかった。

1939年11月30日、ソ連がこの小さな隣国に攻撃をしかけて始まり、1940年3月12日、一方的な休戦によって終わったフィンランド・ソビエト冬戦争の敗戦の後でさえ、彼らは大会を諦める動きを見せなかった。フィンランド組織委員会がついに諦めたのは、1940年春、ドイツ軍がスカンディナビア占領をはじめた時であった。

彼らは自分たちの決定を1940年4月23日、バイエ-ラツールに打電した。

そしてバイエ-ラツールは1940年5月2日の回状で、IOC委員に通知した。

この手紙で彼は真の理由、戦争を名指しすることをせず、単に、組織委員会が大会を開催することが不可能であり、オリンピック憲章の第2条によって第XIIオリンピックの大会は行われぬ、とだけ述べた。

2.7. オリンピック冬季大会

2.7.1. 冬季大会の導入

既に述べたように、クーベルタンはオリンピック大会全般への女性の参加を防ぐことに成功しなかったが、それ以上に、冬季大会の導入反対にも成功しなかった。

フィギュアスケートがプログラムにのる最初の冬の競技となった1908年のロンドンでのささやかな始まりのあと、1920年のアントワープでアイスホッケートーナメントが付け加えられた。

1921年のローザンヌでのオリンピックコンGRESSは、将来、オリンピック大会と関連して冬の競技ウィークが開催されるべきことを決めた。しかしこれは当該開催国が必要な地理的条件と組織上の条件を満たすときに限るとされた。

結局、1925年、IOCはプラハで夏とは別のサイクルの冬季大会を導入することを決めた。これはオリンピック大会と同じルールで、同じ年にIOCの決める場所で行われるが、その決定に当たっては夏の大会の開催国が第一優先権を持つとしている。

次のコンGRESSと国際スキー連盟は、1924年の国際ウィンタースポーツウィークをさかのぼって「第1回オリンピック冬季大会」と認めて欲しいという希望を表明していたが、この希望はIOCの1926年のリスボンセッションで満たされた。

2.7.2. サンモリッツ 1928年

1923年のローマでの第22回IOCセッションで、オランダの委員が、自分の国は気象上の理由で国際ウィンタースポーツウィークを開催することができない、だから他の国、例えばスイスのような国に急場を凌いでもらいたいと述べた。さまざまな関心ある国がオランダオリンピック委員会に接触し、オランダオリンピック委員会はそれをIOCに伝えた。

プラハのセッションでスイスの委員、ゴッドフレー・ド・ブロネーがスイスによる招致を発表した。

1925年11月のパリでの執行委員会－バイエラツール新会長の下での第1回会議－でブロネーは開催可能な場所として三つのスイスのリゾートの名をあげた。サンモリッツ、エンゲルベルク、ダボスであった。

スイスオリンピック委員会が早い決定を求めたので、バイエラツールは郵便によってIOC委員にサンモリッツに投票させようとした。ところがエドストレームの提案でECは直ちにアッパーエンガディンのリゾート(訳注:サンモリッツ)に決定してしまった。そしてスイスオリンピック委員会が必要な保証を準備出来次第、IOCに通知されることになった。

しかし、1926年3月、パリでの次のEC会議で、スイスの三つのリゾートからの招致と保証がすべて提出され、決定はその年のリスボンでのIOCセッションに付託された。

サンモリッツとダボスが凌ぎを削った長い議論の間には二つのリゾートで競技を分ける案さえ考えられたが、最後にIOCは22対1という投票によって、はっきりとサンモリッツを選んだ。そのあと、オリンピックのスケート種目をダボスで行いたいと強く求める国際スケート連盟(ISU)からの圧力もあったが、考えが変わることはなかった。

冬季大会の期間は二つの日曜日を含む最大8日間と定められた。しかしIOCも冬季大会組織委員会も決して決定には固執しなかった。

冬季大会のプログラムに関しては、ブラハコングレスは議論の根拠を前年の国際ウィンタースポーツウィークに置くことができた。シャモニーでは16か国からの300人程の参加者が五つの競技の14の種目で競技した。

フィギュアスケートは男子、女子、ペアで行われたが、他の競技は男子だけであった。スピードスケート(500m、1,500m、10,000m、そして四種競技)、アイスホッケー、ノルディックスキー(18km、50km、ジャンプ、複合)、そして最後にボブスレーであった。

コングレスはトボガンをメインプログラムの五つの競技に加えた。

そしてこの結果はオリンピック憲章に書き込まれた。国際競技連盟によって統括されていない競技、例えばこの時はスケルトン(小型橇)やスキーヨーリング(馬に引かせる橇)であったが「デモンストレーション」のタイトルでのみ含まれるという但し書きがつけられた。また特別に軍隊スキー競技も行われるであろうと書かれた。

しかしこの点について、憲章は明らかに非常に柔軟なガイドラインと見なされていた。つまりスイス組織委員会が1926年7月にハーグでプログラムの草案を提出したとき、二人乗りボブスレー競技、トボガン、そして国際スキー連盟(FIS)の要求によって軍隊パトロールスキーレースはリストから外された。

しかしこれは1928年のプログラムについての論議の結論ではなかった。1927年はじめに続いて行われたEC会議で、軍隊パトロールについてさらに熱い議論が戦わされた。

エドストレームはこのようなタイプの軍隊競技はオリンピックの理念と関係ないと考えその主張は優勢だったが、最終的に、この競技はスイスの提案したカーリングに代わってデモンストレーション種目として承認された。

スケルトンレースはスイスがプログラムに含めることを希望した。しかし国際競技連盟がないので憲章によれば許されないはずであったが、執行委員会はこれを承認した。

イギリスの委員、レジナルド・ケンティッシュはこの競技を国際ボブスレー連盟によって行うことはできないので、別の競技連盟をつくる必要があると反対した。しかしこの反対は単なる技術的問題だとして、ECに却下された。

ケンティッシュの疑念は、スケルトン連盟はそれ以後も設立されず、サンモリッツの競技たった一回だけで終わってしまったことで、正しかったことが証明された。

1927年4月のモナコにおけるIOCセッションで、ボブスレーとスケルトンに各国二台のエントリーが認められて、プログラムは14種目に決定された。1928年2月11日から19日の間に行われた大会には、25か国から500人足らずの選手が参加した。

2.7.3. レイクプラシッド 1932年

IOCが、冬と夏のオリンピック大会をどの程度ひとつの単位と考えていたかは、バイエラツールがアムステルダム大会期間中のセッションで、1932年冬季大会開催の可能性のある都市を招くに当たって、北アメリカオリンピック委員会やアメリカのIOC委員ではなく、1932年ロサンゼルスオリンピック大会の組織委員会を招待した事実を示されている。

ローザンヌの第29回セッションでIOCは레이크プラシッド、ヨセミテバレー、レイクタホ、ベアーマウンテン、デュルス、ミネアポリス、デンバーの立候補を受けた。

このうちのいくつかは地元の招致委員会の代表を送った。

カナダの都市、モントリオールの立候補が受け入れられるかどうか議論となったが、バイエラツールはアントワープ以来の歴史的な経過と、とりわけオリンピック憲章に触れる長い演説をして、受け入れられないという意見を支持した。

それにもかかわらず、何人かのIOC委員はモントリオールを支持した。アメリカの立候補都市の組織能力が信頼できなかつたからである。ノルウェーのIOC委員、トマス・フィアーンリーは、アメリカの都市が本当に冬季大会を開催する能力ないことが分かった場合、いささか唐突だが、ノルウェーが肩代わりしてもいいと発言した。

エドストレームはレイクプラシッドを支持し、ウィンタースポーツの競技会を25年にわたって開催している経験に言及した。このリゾートは東海岸に近く、ヨーロッパ人にとっては行きやすかつた。各競技連盟もここに票を投じた。

レイクプラシッドの代表、ドッドフレイ・デューイはヨーロッパのウィンタースポーツのリゾートを長い間旅して研究していたが、求めに応じて、スケルトンのコースの建設と宿泊費(ファミリーメンバーも)がサンモリッツを上回らないことを約束した。

そこでIOCはレイクプラシッドに全会一致の投票をした。

後に、スケルトンのコースの建設は結局非常に高くつくことが判明したし、エントリー数が必要数を満たしそうもなかつたので、1930年のベルリンセッションはあっさりスケルトンをレイクプラシッドのプログラムから外した。

バイエラツールはレイクプラシッドの準備が順調なペースで進んでいることを自分で確かめるために、1930年の夏、現地を訪ねた。そして10月のパリでの執行委員会の会議で肯定的な報告をすることができた。

第Ⅲ回オリンピック冬季大会は、1932年2月4日から15日まで、17か国から男女300人の選手が参加して行われた。1928年と同じように14の種目でメダルが争われた。

二人乗りボブスレーがキャンセルされたスケルトンに代わった。加えて、五つのデモンストレーション種目が行われた。女子スピードスケート、500m、1,000m、1,500m、カーリング、犬橇レース、であった。犬橇レースは、ボブスレー・リュージュ連盟会長、ルノー・ド・ラ・フレゴリエール伯爵が、1928年、サンモリッツでのECと各種ウィンタースポーツ連盟の会長との会議ですでに提案していたものである。

2.7.4. ガルミッシュパルテンキルヘン 1936年

1936年を目指して、夏の大会開催地として選ばれた国が開催不可能になった場合に備えて、モントルーと再びサンモリッツが、1930年のベルリンでのIOCセッションで冬季大会に予備立候補の届け出をした。

しかし1931年のバルセロナでのIOCセッションのあと、ベルリンが郵便投票で1936年大会の開催都市に選ばれたとき、ドイツオリンピック委員会はオリンピック冬季大会開催の優先権を行使することを発表した。しかしロサンゼルスオリンピックの際のセッションで、ドイツの委員、テオドール・レヴァルトは、深刻な経済状態に照らして、注意深く確約を避けた。それでもなお、彼はガルミッシュ

とパルテンキルヘンというごく近い二つの場所を使う形の会場の可能性を仄めかした。

ドイツの躊躇いに促されて、カナダのジェームズ・メリックは、オリンピック大会の開催国が冬季大会開催にも優先権を持つというルールについて議論を始めた。メリックは夏のオリンピックを開催することのできない多くの小さな国も、冬季大会を開く能力は持っていることを指摘し、二つのオリンピックのサイクルを完全に分けることを主張した。

長い議論のあと、バイエラツールはオリンピック憲章の原則の変更は議題にないし、そのような変更はクーベルタンに対する反逆になると訴えるしかなかった。

クーベルタンはこれらの基本原則は不変であるとしていたが、この議論は冬季大会を導入するという変更が既に行われている以上、あまり説得力のあるものとは言えなかった。それにクーベルタンは、冬季大会導入の変更についてはほとんど気にならなかったのである。メリックが1933年のウィーンでのセッションで再びこの議題を持ち出したとき、問題は執行委員会ですらに検討されることになった。

いずれにせよ、ウィーンではもはやドイツの躊躇いという問題はなかった。

ナチスはオリンピック大会を積極的な宣伝に使うことの大きな可能性を認識しており、あらゆる手段を尽くして組織委員会を支持していた。ドイツのIOC委員たちは今や、ガルミッシュパルテンキルヘンを公式に開催場所に指定し、自分自身IOC委員でありながら、ヒトラーの賛美者でもあったカール・リッター・フォン・ハルトが組織委員会会長になることになっていた。

オリンピックのルールがナチスドイツによって無視されるのではないかという恐れが、ドイツ政府の保証によって鎮められると、ベルリンを開催都市として再確認していたIOCは、今度はガルミッシュパルテンキルヘン承認を発表した。

ガルミッシュパルテンキルヘンで1936年2月6日から16日まで行われた第IV回オリンピック冬季大会には、28か国から750人程の選手が競技に参加した。

カーリングと共に軍隊スキーパトロールがデモンストレーションとして三度目の登場をした他、4 X 10kmのノルディックスキーリレー、アルペン複合(滑降と回転)が公式プログラムに新種目として含まれた。また1934年のアテネでのIOCの9対8の投票による決定で女子のアルペン複合も導入された。

アルペンスキーの導入はアーノルド・ルンの生涯をかけた願いの達成であった。

しかし彼の喜びは、アマチュアリズムの章で述べたスキーインストラクターのアマチュア資格をめぐるFISとIOCの紛争によって曇らされていたことは疑いない。この紛争の結果、とりわけオーストリアとスイスのベストスキーヤーが大会出場を禁じられた。そしてFISは一方的に1940年の冬季大会不参加を決定した。この大会は結局、戦争の犠牲になって行われなかった。

2.7.5. 札幌／サンモリッツ／ガルミッシュパルテンキルヘン

1940年の冬季大会をどこで開催するかという問題が初めて論議されたのは、1935年のオスロでのIOCであった。ここでは、それぞれの首都が1940年のオリンピック大会開催地に立候補している、イタリア、日本、フィンランドのオリンピック委員会が冬季大会も開催したいという希望を表明した。

アルベルト・ボナコッサ伯爵は、早くもイタリアの候補地としてコルチナダンペッツオーの名をあげることができた。エドストレームはもし東京が指名された場合、日本は冬季大会開催に困難を感じ

るに違いないのでより小さい国に委託すべきだという意見を表明した。次の年のベルリンセッションで東京が成功を収めたとき、日本人はまだ冬季大会の場所について具体的な提案をできなかった。暫定的に日光と札幌の名があげられたが日光は高さが十分でないことが判明した。サンモリッツ、オスロ、カナダは、もしオリンピック大会の開催国が冬季大会開催の権利を放棄したいと望むなら、1940年の冬季大会を引き受ける用意があることをIOCに通知した。

1937年のワルシャワでのセッションで、冬季大会についてさらに激しい、そして今度は根本的な議論が行われた。そのなかで、エドストレームは、あまりに多くのウィンタースポーツ連盟がオリンピックの原則、すなわちアマチュアリズムに抵触しているので、冬季大会を廃止すべきだとの提案さえした。この動議は26対1で否決された。賛成の1票はエドストレーム自身のものであった。しかしIOCは1940年の冬季大会は競技連盟がIOC参加規則を守る場合に限り開催されると決定した。

日本が優先権を行使するかどうかについての疑いが表面化して、夏の大会を開催する能力はないが、冬季大会の開催能力はある小さな国の問題が再び論議された。

フィアーンリーは再びオスロを提案し、憲章の改正を呼びかけた。その理由は、そうしないと、ウィンタースポーツの生みの親であるノルウェーは冬季大会を開催できるまでにあまりに長い間待たなければならないだろう、というものであった。

バイエ-ラツールは、五年前にあれば激しく反対したのと対照的に、今や改正に賛成であった。

改正を次のセッションの議題にとりあげることに賛成し、オスロを万一の場合の頼りになる候補者と呼んだ。その時、副島道正伯爵が札幌を冬季大会の会場として提案し、とりあえずこの議論に終止符を打った。彼の提案は満場一致で承認された。

1938年3月、IOCがカイロで会合した時、日中戦争は既に日本のオリンピック大会自体の開催能力に対する疑いを引き起こすまでになっていた。しかしながら、日本のIOC委員と組織委員会のテクニカルアドバイザー、ドイツ人のヴェルナー・クリンゲベルクは、そのような恐れを鎮めるのにおおよそそのところ成功していた。冬季大会については事務総長さえ決まらず、日本の組織能力についても疑問が起きていた。日本はまだ冬季大会開催に関心を持っているかとあからさまに聞かれたとき、加納治五郎は強く「イエス」と答えた。

こうして日本が依然開催国と見なされている大会の上には、FISのボイコットの脅しによってさらに黒い雲が垂れ込めていた。FISはスキーインストラクターのためにアマチュア資格を獲得しようと企てていたのである。

スキー競技は冬季大会の中心なので、スキーインストラクターについての態度を変えようとするしないIOCは三つの最悪の選択肢のうちから少しでもましなものを選ばなければならないという難問に直面していた。つまり冬季大会を全面的にやめるか、少なくとも1940年大会だけ中止するか、1940年大会を開催するがスキーなしのプログラムとするかである。

ナイル河の蒸気船に集まったIOC委員は、1938年3月13日、FISの圧力に屈しないことを決めた。スキー連盟の巻き添えにして他のウィンタースポーツをひどい目に合わせないために、彼らは第三の選択肢を断固として選んだ。

三日目、冬季大会の開催都市指名に関するルールが論議され、憲章の関連ある条項については、全会一致で会場の決定権は以後IOCのみが持つように修正された。当該NOCも、その場所が冬季大会を全体として開催できるという十分な保証を提出しなければならないことになった。

IOC委員の中には依然として日本が辞退することになるのではないかと恐れている人がいた。結局彼らが正しかったことになるのだが、そのためにセッションのあとに秘密会が持たれた。前にも述べたように、その会議では、辞退があった場合執行委員会には必要な決定をする権限が与えられていた。

フィアーンリーは再び、オスロを冬季大会の代替地として押した。彼はまた、その時にはIOCが例外措置としてFISのスキーインストラクターについてのルールを受け入れるよう希望した。アベリー・ブランデーとクラレンス・アバデア卿は、1940年以後FISが態度を変えることを当てにして、そのような例外を認めることに同意したが、バイエラツールは、アマチュアルールは変えることができないという厳格な意見に固執した。

1938年7月15日から16日の間の深夜に、日本は遂にオリンピック開催権を返上した。

そこでバイエラツールは18日朝、フィンランドのIOC委員エルンスト・コルギウスに救いを求めた。そして次の日、ヘルシンキが1940年のオリンピック大会を引き受けるという保証を得た。冬季大会については、フィンランドは引き受けようとしなかった。一つの理由はボブスレーのコースを作れると思わなかったためである。

その時オスロの可能性はもはやなかった。というのはこの間に、FISがノルウェーの首都をスキーの世界選手権の会場に指定していたからである。冬季大会に直接対抗することを意図したものであった。

その結果、IOC指導部はスイスオリンピック委員会と交渉を始めた。そしてサンモリッツ市が大会開催に同意した。そのプログラムはフィギュアスケート、スピードスケート、アイスホッケー、ボブスレー、リュージュ、デモンストレーションとして軍隊スキーパトロール、スキージャンプ、スキー回転であった。

9月3日、ブリュッセルでの執行委員会は冬季大会を1928年以来再び、エンガディンの世界的に有名なリゾート(訳注:サンモリッツ)に委託し、そこでは直ちに準備が始まった。

1939年3月18日、ローザンヌで、大会開催に関する技術的問題についてバイエラツールと組織委員会の間で議論が起こった。そして二ヵ月後、新聞にスイススキー連盟の圧力のためにスキーのデモンストレーションは行われぬという記事が出始めた。

そこでIOC会長は、ECのメンバーであったカール・リッター・フォン・ハルトの斡旋でドイツオリンピック委員会と連絡をとって、もしもの場合、ガルミッシュパルテンキルヘンが引き受けてくれるかどうか打診した。

5月8日、帝国スポーツ総統ハンス・フォン・チャンマー・ウント・オステンはヒトラー官房長ハンス・ラマーにこのことを告げた。ラマーは直ちにヒトラーに報告した。

ヒトラーは勿論、平和愛好国ドイツを世界に宣伝するような機会を見逃そうとはしなかった。彼はポーランド攻撃の準備に忙しかったにもかかわらず、同意を与えた。

1939年6月6日、第39回IOCセッションがロンドンで始まった。そこで長い議論のあと、IOCが憲章の解釈と大会のプログラムについて唯一絶対の権威を持つことが再確認された。組織委員会はそのルールに従わなければならない。スイスオリンピック委員会は電報で、要求されているスキ

一のデモンストレーションを実施できるかどうか6月8日までに最終的に回答するよう求められた。

その間、ガルミッシュパルテンキルヘン、レイクプラシッド、モントリオールのすべてが、可能な代替地として名前を挙げられていた。

指定の日までに返事が来ないので、締切りを一日延ばすという第二の電報が打たれた。

フィアーンリーのいっそ1940年冬季大会をやめにして自分たちの置かれた不愉快な状況から抜け出そうという提案は、27対2で否決された。

スイスオリンピック委員会から6月9日午後、スキーのデモンストレーションは計画されてないという返事が来たとき、IOCは大会をサンモリッツから引き上げ、全会一致をもってガルミッシュパルテンキルヘンに移した。

この決定に至るについては、1933年、1934年のセッションで問題になったドイツにおけるユダヤ人の迫害は何の役割も果たさなかった。丁度6カ月前には「帝国のユダヤ人迫害の夜」でそれが誰の目にも明らかクライマックスに達していたにもかかわらず。またズデーテン併合があったにもかかわらず。

ドイツではフォン・ハルトを会長、ディームを事務総長に組織委員会が作られた。組織委員会は直ちに動きはじめた。スキーインストラクター問題についての投票のためのFIS特別会議招集が失敗したのに続いて、ディームはスキー種目に代えて、12,000人のスキーヤーによるデモンストレーションを企画した。これには1,500人の外国人スキーヤーの参加が予定されていた。そして各国連盟が経済的理由からオスロのFIS世界選手権だけに参加することのないよう、彼らの旅費が負担されるはずであった。

また、初めて女子のスピードスケートが行われる筈であった。IOCは1939年のロンドンセッションにおいて16対11でプログラムに入れることを決定していた。同じセッションで、1944年の冬季大会の開催都市を決める投票が行われ、イタリアのリゾート、コルチナダンペッツオーが二回目の投票でモントリオールをやぶった。しかしこの計画も、1939年9月1日、ヒトラーの命令によりポーランドが攻撃され、第2次世界大戦が始まって虚しくなった。

それにもかかわらず、IOCはドイツ組織委員会が返上する1939年11月22日まで、冬季大会が計画したようにすすめられることを期待しつつけていた。

2.8. 地域大会

2.8.1. 緒言

前に見たように、IOCは従来、オリンピックにとって潜在的脅威となるものを防ぐ点では極めて用心深かった。スタイルや国際的規模や実施される競技でオリンピックに似ている形のスポーツ大会、そしてとくにそこでオリンピックの名が「悪用される」場合には厳しく介入しようとした。

しかしIOCは、多くの地域、非常に遠い距離がオリンピック参加を妨げているような国々では未だにオリンピックの意味におけるスポーツは育っていないことをよく知っていた。その発展を助けることはIOCが非常な努力を払った仕事の一つであった。とくに1920年代には、IOC委員を送って大陸や亜大陸のスポーツ大会のいろいろな組織委員会を助け、アドバイスし、後援をする努力をした。

スポーツ発展のための援助の一つのタイプに対する関心からIOCは、これもまた世界的に活動していた組織であったYMCAと接触するようになった。1920年のアントワープセッションのゲストとして出席したYMCAのスポーツ局長、エルウッド・S.ブラウンは、スポーツ後進地域の大会で彼の組織の「オールスポーツフォアオール」のプログラムを如何に推進するかについてのアイデアを説明した。

ブラウンは1921年に上海で開催予定の極東大会、1922年にリオデジャネイロで開かれる南アメリカ大会、そして1914年に予定されていたが戦争のために中止されたインド大会の例を引き合いにだした。彼のYMCAとIOCの協力の提案は委員たちの拍手をもって迎えられた。ブラウンは1921年、1922年、1924年のセッションに出席したが、これは多くのIOC委員より良い出席率であった。そこで彼はその時々開催の迫っている地域大会の準備状況について報告した。

これに続く時期に、IOCは地域大会を後援しただけでなく、地域大会を発足させるに当たってますます大きな役割を果たすようになった。IOCは公式の代表を送り、とくにバイエ-ラツールは地域大会に特別の関心を払った。

バイエ-ラツールは二回目の世界旅行の途中南アメリカの国々を訪れ、そこでのスポーツの発展について多くの議論を重ねたあと、1924年のパリでのIOCセッションで自ら四つの会議、極東大会、ラテンアメリカ大会、中央アメリカ大会、パンインド大会についての会議の議長をつとめた。この会議にはそれぞれの地域に関係のあるIOC委員が出席した。

10年間以下に述べるような非常な努力をしたあと、1934年、IOCは次の地域大会に責任を持つことになった。

「パンインド大会(第1回西アジア大会)ニューデリー、1934年2月27日から3月3日、第10回極東大会、マニラ、5月12日開会予定
第3回中央アメリカ大会、サンサルバドル、1934年12月
バルカン大会、ソフィア」

参加国のIOC委員はこれら全ての大会の組織委員会で積極的に活動した。

開会式と閉会式はオリンピックの式典に習い、主催国の国家元首が開会を宣し、バイエ-ラツールの祝電、時にはクーベルタン祝電さえ読み上げられるのが常であった。

2.8.2. 極東大会

第1次世界大戦以前にも、クーベルタンは極東陸上協会に連絡をとっていた。極東陸上協会は当時アメリカの占領下にあったフィリピンのマニラで1913年、YMCAと協力して第1回東洋オリンピック大会を開催していた。

この大会をクーベルタンに「オリンピックの幼稚園」と説明した主催者は、おそらくIOCの要請によって、大会をIOCの監督下に置き、その後「オリンピック」という名を使うのをやめた。第2回は極東選手権という名を使い、その後極東大会の名を確立した。

1927年まで、大会は二年ごとに三つの太平洋の主要都市、マニラ、上海、東京で順に開催された。しかし1930年以後は、四年ごとに各オリンピックの三年目に開催された。

四つのオリンピック競技、陸上、水泳、テニス、サッカーの他、極東大会はバスケットボール、バレーボール、野球を1913年の発足当時から行っていた。これらの競技がそれぞれオリンピックのプログラムに採用される1936年、1964年、1992年よりはるか以前のことである。女性に関しては、1927年、第Ⅷ回上海大会でテニスのシングルとバレーボールが行われた。これは1928年IOCセッションのバイエ-ラツールIOC会長が議長をつとめた極東大会委員会に提出された報告に見える。

これを聞いて啓発されたバイエ-ラツールは極東大会の結果をオリンピック大会の結果と同じようにIOCブレッティンに掲載させた。

とくに成功したのは1930年、東京で行われた第Ⅸ回極東選手権大会で、この成功が1940年のオリンピックに東京が選ばれる理由の一つとなった。

開会式で加納治五郎はIOC会長からの祝電を読み上げ、競技はせまい範囲にまとめられた競技場で行われ、合計30万人の観客が詰めかけた。競技水準は次第にオリンピックのそれに近づいていた。ルールもこの機会に行われた極東陸上協会の kongress の決定で、オリンピックのルールに一致するようになった。

1936年のベルリンIOCセッションで地域大会についての一種の実績評価が行われた。

バイエ-ラツールはIOCに対し、極東大会の主催者、極東陸上協会は解散し、その後身、東洋アマチュア陸上協会は中国をメンバーに入れていないことを報告した。

彼の意見では、もはや極東大会には正当性はなく、十分な水準に達した選手はオリンピック大会にのみ参加すべきであった。また極東からも参加する西アジア大会が始まる可能性もあった。しかしIOC委員である日本の副島道正伯爵と中国のチェンティン・ワンは自分たちの間で極東大会を存続させる道を探ろうとした。この動きは第2次世界大戦によって妨げられた。

2.8.3. 西アジア地域大会

1924年のパリセッションで、計画されながら1914年第1次世界大戦のため中止されたインド大会の十年後に、パンインド大会開催の可能性がこのために招集された会議で討議された。しかし第1回西アジア陸上大会がニューデリーの新しく作られたスタジアムで1934年3月開催されるまでには更に10年待たねばならなかった。この大会の推進者はインドのIOC委員グル・ドゥット・ソンディで、インド、アフガニスタン、セイロン、パレスチナの選手が参加した。この際、この大会のための協会が設立され、イランが参加した。

第2回西アジア大会は1938年パレスチナで開催される予定であったが、これも軍事紛争のため、中止になった。

2.8.4. ラテンアメリカ地域大会

1922年、リオデジャネイロの南アメリカ大会はブラジル建国百年祭の頂点となるはずであった。

IOCが後援をし、もしこの大会が成功すれば二年ごとに繰り返される筈であった。1922年のパリセッションで報告したYMCA代表、ブラウンは計画に伴う困難について説明した。南アメリカ亜大

陸の多くのカトリック国は、プロテスタントのYMCAが主役を演ずるこのイベントには乗り気でないだろう。事実参加国は少なかった。

1924年のパリセッションの際、参加国は1925年のプラハセッションまでに、次の大会のプログラムと会場について意見をまとめるよう求められた。この期日は虚しく過ぎてしまった。アルゼンチン、ペルー、チリ、パラガイ、そしてYMCAは第2回南アメリカ大会の会場を一気に決めてしまおうと、1928年7月31日、アムステルダムで会合した。

しかし1922年の経験と、亜大陸の広大さと、ほとんどのメジャースポーツで南アメリカ選手権が確立されていることから、彼らは反対に、自分たちの大会を開催する努力はしないと決定してしまった。この決定は、この地域の選手がオリンピックに沢山参加したことによって支持される形となった。

もっと成功したのは中央アメリカ大会で、やはり1924年のパリで出発した。第1回大会は1926年、メキシコシティで、第2回は四年後ハバナ(キューバ)で開催が予定された。このように最初からオリンピックの四年サイクルでオリンピックアドの中間年に競技が考えられていた。1924年12月にメキシコに「国の評議会」がつくられ準備を始めたのに続いて、コロンビア、コスタリカ、キューバ、グアテマラ、ハイチ、ホンデュラス、ジャマイカ、ニカラガ、パナマ、サルバドル、そして主催国メキシコが参加して、1925年10月同じ場所で「全体評議会」が行われた。

この会議で、第1回大会を10月12日から11月2日までの三週間とし、プログラムを決めた。プログラムは五つの競技グループ、つまり「陸上」(トラック、フィールド)、「フェンシング、射撃」、「水泳」(男子、女子)、「馬術」(ポロ)、そして「ゲーム」(男女のテニス、バレーボール、野球、バスケットボール、サッカー)から選んだ10種目からなり、「ハリペオメキシカーノ」のデモンストレーションも含まれた。

中央アメリカの主催者とIOCがこの大会をオリンピックムーブメントと密接に結び付けようとしたことは、いくつかの点から明らかである。すなわち、大会の運営委員会のテクニカルディレクターはIOCによって指名され、各国の委員会はIOC委員を含み、バイエラツールは大会の名誉審判団に指名された。そして第1回大会の「一般ルール」とプログラムがIOCブレットインに掲載された。そこには例えば次のような文言が見える。

「中央アメリカ kongress の会議で承認され、1924年7月4日、パリの国際オリンピック委員会で公認、後援されることになった。」

さらに1928年8月1日、IOCセッションの行われているアムステルダムで、中央アメリカ大会についての特別会議が開かれた。この会議には、コスタリカ、パナマ、サルバドル、グアテマラ、メキシコ、ハイチ、それにYMCAの代表が参加した。会議では、この大会がオリンピックの準備に大変適しているとされた。議論の主な焦点は1930年にハバナで予定される第2回大会であった。第2次世界大戦までに、この大会はさらに二回開催された。竜巻のため一年延びた1935年のサンサルバドル大会。そして1938年のパナマシティでの中央アメリカ・カリビアン大会である。

1938年にはまた、IOCが1936年のベルリンセッションで討議していた、第1回ボリビア大会がコロ

ンビアの首都ボゴタで開かれた。この大会は、自由の戦士、シモン・ボリバルの思い出に捧げられ、シモン・ボリバルに多くを負う国々、植民地勢力からのラテンアメリカ開放運動によって19世紀初頭に生まれた国々の選手を対象とした。

2.8.5. アフリカ大会

IOCの努力がもっぱらアジアと南アメリカに注がれていたのに対して、クーベルタンは1923年のローマセッション開会の演説で、未だ空白の大陸アフリカを思い起こし、アフリカの「征服」に彼の会長職の最後の目標を置いた。「それ故に、躊躇わずアフリカの参加を助けよう。資格のある勢力の代表がわれわれと話し合うためにここにやって来た...」

セッションに関連して、植民地勢力の代表がローマで会合し、アフリカ大会をアフリカ大陸のいろいろな都市で二年ごとに開く計画を討議した。

この委員会は、大会には「原住民」だけが参加できるようにすべきだという、クーベルタンの提案を拒否した。クーベルタンは特別の組織委員会を作り、地域的な性格の強い単純なプログラムでやるべきだと考えていた。委員会はそれに加えて、アフリカに少なくとも二年以上住んでいる植民者も参加できるような競技も用意すると決議した。

IOCは結局、1923年4月9日、第1回アフリカ大会を1925年アルジェーで、第2回大会を1927年にアレキサンドリアで開催すると決定した。

しかし1924年のパリでの次のセッションで、IOCはアルジェーにおける運営上の困難から、アフリカ大会の開催を1927年のアレキサンドリアまで延期せざるを得なかった。

1926年4月、詳細な招待状がIOCブレッティンに掲載された。大会自体はオリンピックプログラムの縮小版で、陸上、自転車、体操、重量挙げ、フェンシング、グレコローマンレスリング、イングリッシュボクシング、ローンテニス、サッカーであり、それにエジプトのナショナルスポーツ、ナブート（「剣道」）と「馬のファンタジー」がアフリカ生まれの男子アマチュア選手だけに参加が認められた。

しかしそれに加えて、1923年のローマの決議に従って、二年以上エジプトに住んでいるアフリカ生まれでない選手のための競技も行われることになった。

しかしスタジアムの建設が計画どおり進まないのので、1926年はじめ、ボナラキはIOC会長、バイエラツールに大会を1929年まで延期するよう要請せざるを得なかった。

代わって開催する国も見当たらなかったのので、執行委員会とセッションは同意するしかなかった。エジプトのIOC委員の示唆で1927年と1929年のセッションで再び長時間にわたって参加資格の問題が論じられた。その結果、アフリカ生まれの選手と共に、アフリカに住んでいる選手も制限なく参加できることになった。

この間、スタジアムが完成に近づいていた。そしてファード国王による大会の公式の開会が1929年4月5日に予定された。IOCセッションがアレキサンドリアで3月31日開始が予定され、一緒に開催される文化プログラムも既に準備を終わっていた。

その時、わずか数週間を前に、植民地勢力のイギリスとフランスがイベント開催に待ったをかけた。執行委員会は急いでセッションをローザンヌに移した。

そこでは最近の一連の出来事が論じられ、北アフリカ大会、或いは地中海大会の可能性が提起された。ボナラキは欠席していたが、彼の疲れを知らぬ貢献を感謝された。

アフリカ大会は差し当たり失敗した。そしてアフリカ大会を開催しようとする努力は第2次世界大戦終了の後まで再びなされることはなかった。

アンリ・ド・バイエラツール会長(1925—1942)の時代.....	205
2. バイエラツール会長(1925—1942)の時代	206
2.1. クーベルタン、オリンピックの舞台を去る.....	206
2.2. バイエラツール.....	208
2.3. IOCと執行委員会—構造的枠組み.....	213
2.3.1. メンバーシップ.....	213
2.3.2. セッション.....	215
2.3.3. 執行委員会.....	216
2.4. 女性の登場.....	218
2.4.1. 最初の女性陸上競技連盟.....	218
2.4.2. オリンピック大会における女性の陸上競技.....	221
2.4.3. <i>FSFI</i> の終わり.....	222
2.5. アマチュア問題.....	224
2.5.1. 憲章上のアマチュア.....	224
2.5.2. テニス連盟離反.....	226
2.5.3. 失われた収入の補償についてのIOCとFIFAの意見不一致.....	227
2.5.4. 「セミプロ」に対する戦い.....	230
2.5.5. スキーのインストラクター、ジムのマスター、スポーツライター、ステートアマチュア.....	231
2.6. オリンピック大会.....	234
2.6.1. 緒言.....	234
2.6.2. アムステルダム 1928年.....	234
2.6.3. ロサンゼルス 1932年.....	237
2.6.4. ベルリン 1936年.....	242
2.6.5. 東京／ヘルシンキ 1940年—開かれなかった大会.....	254
2.7. オリンピック冬季大会.....	256
2.7.1. 冬季大会の導入.....	257
2.7.2. サンモリッツ 1928年.....	257
2.7.3. レイクプラシッド 1932年.....	258
2.7.4. ガルミッシュパルテンキルヘン 1936年.....	259
2.7.5. 札幌／サンモリッツ／ガルミッシュパルテンキルヘン.....	260
2.8. 地域大会.....	263
2.8.1. 緒言.....	263
2.8.2. 極東大会.....	264
2.8.3. 西アジア地域大会.....	265
2.8.4. ラテンアメリカ地域大会.....	265
2.8.5. アフリカ大会.....	267